女子國文新編

四年制　卷五

42118
教科書文庫
4
810
42-1941
200030
2282

教科書文庫
4
810
42-1941
2000302282

375.9
Ka9

文部省檢定濟

高等女學校國語科教科書

昭和十六年九月廢止

女子國文新編

四年制

東京高等師範學校教授

垣内松三編

広島大学図書

2000302282

資料室

一　國民文化と國語教育との關係を基本として國民精神の涵養を意圖しました。

二　教材の選擇については特に文章の本質と學習指導の方法とを考慮しました。

三　縱に學年を貫き横に學期を連ねて組織的及び圓周的に教材を排列しました。

四　右編纂の大綱の外本書に關して必要なる事項は別に趣意書に詳記しました。

廣島大學圖書之印

廣島大學教書
41404

目次（巻五）

一　國語の自在性……西田幾多郎……四
二　京の春……夏目漱石……一〇
三　小鳥……薄田泣菫……二三
四　望郷五月歌……佐藤春夫……二八
五　緑の感覺……川島理一郎……三三
六　うひ山ふみ……本居宣長……四二
七　有王島下り（平家物語）……五四
八　雨の興……松平定信……六五
九　螢二題……荻原井泉水……七〇
一〇　阿新丸（太平記）……八四
一一　夕立……德富蘆花……九六
一二　墨田初子……一〇一
一三　木精……森鷗外……一一〇
一四　近古歌人鈔……西行・源實朝・藤原定家・藤原俊成・宜秋門院丹後……一一九
一五　空行く雁（曾我物語）……一二五
一六　利根の秋曉……德富蘆花……一三〇
一七　鐘の音……奥田正造……一三三
一八　法隆寺……高濱虛子……一三七
一九　ミレー……相良德三……一四一
二〇　家居……吉田兼好……一五〇
二一　ロダン……木村莊八……一六〇
二二　日本趣味……田部重治……一六五
附錄　品詞分類語表
辭書一覽

一　國語の自在性

西田幾多郎

文化の發展には民族が基礎とならねばならぬ。民族的統一を形成するものは風俗習慣等種々なる生活樣式を擧げることが出來るであらうが、言語がその最大な要素でなければならない。故に優秀な民族は優秀な言語を有つ。ギリシャ語は哲學に適し、ラティン語は法律に適すると云はれる。日本語は何に適するか。私は尙かゝる問題について考へて見たことはないが、一例をいへば、俳句といふやうなものは、外國の言語では譯せられないものではないかと思ふ。それは日本語によつてのみ表現し得る美であり、大きく云へば日本人の人生觀、世界觀の特色を示して居るとも云へる。日本人の物の見方考へ方の特色は、現實の中に無限を掴むにあるのである。併し我々は單に俳句の如きものの美を誇とするに安んずることなく、我々の物の見方考へ方を深めて、我々の心の底から雄大な文學や深遠な哲學を生み出す樣努力しなければならない。我々は腹の底から物事を深く考へ大きく組織して行くと共に、我々の國語をして自ら世界歷史に於て他に類のない人生觀、世界觀を表現する特色ある言語たらしめねばならない。本當に物事を考へて眞に或物を掴めば、自ら他によつて表現することのできない言表が出て來るものである。日本語ほど、他の國語を取入れてそのまゝに日本化する言語は少ないであらう。久しい間、我々は漢文をそのまゝに讀み、多くの學者は漢文書下しによつて、否、漢文そのものによつて自己の思想を發表して來た。それは一面に純なる生きた日本語の發展を妨げたとも云ひ得るであらう。併し一面

西田幾多郎　哲學者。文學博士。京都帝國大學名譽教授。明治三年生。

ギリシャ語　印度ヨーロッパ語族で、古代に於てギリシャを中心として語られし語。

ラティン語　印度ゲルマン語族に屬し、古代伊太利に行はれ、今日は學術語としてのみ用ひらる。

には我々の國語の自在性といふものを考へることもできる。

現在の日本は世界の日本として世界に示すべきものを有たねばならない、古今に通じ中外に施して悖らざるものを明かにしなければならない。我々民族は我々民族の心の底から生み出された世界的思想を建設しなければならない。それは單に今日の世界的思潮に對して自家の他と異なる所以を明かにすると云ふのでなく、自己の立場から今日の世界的思潮を消化し、今日の世界的思潮を扱ひ得るものでなければならない。單に己のみを知つて他を知らざるものは眞に己を知るものでもない。鎖國の昔に還すことができるならとにかく、今日の日本として世界的思潮の影響を免れることは、できない。世界的思想に對して自己自身の立場から世界的思想を扱ふことができて、而して後我々は世界的日本として、

外、世界を服せしめ、內、人心を統一することができるのである。世界的となるといふことは、世界に化して自己を失ふといふことではない。私は東洋文化の根柢には、西洋文化に對抗すべき深大なるものがあると信ずるものである。今日の西洋文化はギリシャとユデヤとの二大思潮の合流に基づくものと思ふが、我々は更に東洋文化の流を加へることによつて世界的に貢獻しなければならない。東洋文化の根柢に横たはる世界觀人生觀といふものは、ギリシャ及びユデヤの孰とも異なつたものであり、而も最も深き人間性の一面を示して居るものと考へることができる。唯、我々はそれを何處までも學問的に基礎づけ、組織しなければならない。我々は貴き金屬を含む東洋文化の礦石を近代的に精錬しなければならない。それにはそれだけの組織力が養成せられなければなら

ギリシャ　古代ヨーロッパの王國にして、西紀前四世紀より後六世紀にすぐれたる文化を有つた。

ユデヤ　西紀前十世紀より前一世紀頃、現在のパレスタイン地方に拠えし王國。

ない。

我々は過去の日本人の思想を祖述するのみならず、現在の日本人の中に萌え出る思想の芽生を尊重しなければならない。現在の日本人の仕事に同情し、現在の日本人の仕事を育て上げて行かなければならない。如何なる國の文化發展を見ても始から偉大なるものは生じない。雜草が生え、灌木ができ、遂に天を衝く樣な喬木も生成するのである。雜草だから、灌木だからと云つて、踏みにじり刈倒してゐては、何時までも巨大なる深林のでき樣はない。各國進步發展を競ふ今日の世界の中に立つて、偉大なる日本人の獨創と云つても中々容易でない。我々は寸を得れば寸、尺を得れば尺、一歩々々堅實に進まなければならない。

明治維新の初めに於ける明治大帝の宏遠なる御誓文には、

明治大帝　第百二十二代の天皇。御在位四十六年。明治四十五年崩御、御壽六十一。

世界的に進出した日本として、いつまでも心すべきものがあるのではなからうか。明治時代は外國文化を吸取するに急にして、そのため種々なる弊害を生じたこともあるであらう。さういふ點からは、我々は我々の根本に還つて考へて見なければならぬのは云ふまでもない。私が現代の日本の立場といふのは、過去の歷史を輕視すると云ふのではない。過去といふものなくして現在といふもののないことは云ふまでもない。併し又現在及び未來といふものなくして、過去といふものもない。過去は永遠に生きた過去でなければならない。眞の過去は永遠の現在の意味を有つたものでなければならない。我々は我々の文化の内に、過去を構成し未來に發展する永遠に生きたものを見出さなければならない。

（續思索と體驗）

二京の春

夏目漱石

比叡山

「隨分遠いね。元來何處から登るのだ。」

と、一人が手巾で額を拭きながら立留つた。

「何處か、己にも判然せんがね。何處から登つたつて同じ事だ。山はあすこに見えて居るんだから。」

と、顏も體軀も四角に出來上つた男が無造作に答へた。

反を打つた中折れの茶の廂の下から、深き眉を動かしながら見上げる頭の上には、微茫なる春の空の底までも藍を漂はせて、吹けば搖ぐかと怪しまるゝ程柔かき中に、屹然として、どうする氣かと云はぬばかりに叡山が聳えてゐる。

「恐しい頑固な山だなあ。」

夏目漱石　名は金之助。文學者。大正五年歿、年五十。

山　比叡山を指す。比叡山は京都府・滋賀縣の境界にあり、京都市の東北約四粁。海拔八四八米。

と、四角な胸を突出して、一寸櫻の杖に身を倚たせて居たが、

「あんなに見えるんだから、譯はない。」

と、今度は叡山を輕蔑した樣な事を云ふ。

「あんなに見えるつて、見えるのは今朝宿を立つ時から見えて居る。京都へ來て叡山が見えなくつちや大變だ。」

「だから見えてるから好いぢやないか。餘計な事を云はずに歩いて居れば、自然と山の上へ出るさ。」

細長い男は返事もせずに、帽子を脱いで、胸のあたりを煽いで居る。日頃からなる廂に遮られて、菜の花を染出す春の強き日を受けぬ廣き額だけは、目立つて蒼白い。

「おい、今から休息しちや大變だ。早く行かう。」

相手は汗ばんだ額を思ふまゝ春風に曝して、粘り着いた黑髪の逆に飛ばぬを恨む如くに、手巾を片手に握つて、額とも云

はず、顔とも云はず、頸窩の盡くるあたりまで、苦茶々々に搔廻した。促された事には頓着する氣色もなく、

「君はあの山を頑固だと云つたね。」

と、聞く。

「うむ、動かばこそと云つた樣な按排ぢやないか。かう云ふ風に。」

と、四角な肩をいとゞ四角にして、あいた方の手に榮螺の親類をつくりながら、聊か我も動かばこそその姿勢を見せる。

「動かばこそと云ふのは、動けるのに動かない時の事を云ふのだらう。」

と、細長い眼の角から斜に相手を見下した。

「さうさ。」

「あの山は動けるかい。」

「あはゝゝ、又始つた。君は餘計なことを云ひに生まれて來た男だ。さあ行くぜ。」

と、太い櫻の洋杖をひゆうと鳴らさぬばかりに、肩の上まで上げるや否や歩き出した。瘦せた男も手巾を袂に收めて歩き出す。

「今から登つたつて中途半端になるばかりだ。元來項上まで何里あるのかい。」

「項上まで一里半だ。」

「どこから。」

「どこからか分るものか。高の知れた京都の山だ。」

瘦せた男は何にも云はずにやにや〳〵と笑つた。四角な男は威勢よく喋舌り續ける。

「君の樣に計畫ばかりして一向實行しない男と旅行すると、

どこもかしこも見損つて仕舞ふ。連こそいゝ迷惑だ。」

「君の樣に無茶に飛出されても相手は迷惑だ。第一、人を連出して置きながら、何處から登つて何處を見て何處へ下りるのか見當がつかんぢやないか。」

「なんの、是しきの事に計畫も何も入つたものか。高があの山ぢやないか。」

「あの山でもいゝが、あの山は高さ何千尺だか知つてゐるかい。」

「知るものかね、そんな下らん事を。——君知つてるのか。」

「僕も知らんがね。」

「それ見るがいゝ。」

「何もそんなに威張らなくてもいゝ。山の高さは御互に知らんとしても、山の上で何を見物して何時間かゝる位は多

少確めて來なくつちや、豫定通りに日程は進行するものぢやない。」

「進行しなければ遣りなほすだけだ。君の樣に餘計な事を考へてるうちには、何遍でも遣りなほしが出來るよ。」

と、猶さつさと行く。痩せた男は無言の儘あとに後れて仕舞ふ。

春はものの句になり易き京の町を、七條から一條まで横に貫いて、烟る柳の間から溫き水打つ白き布を、高野川の磧に數へ盡くして、長々と北にうねる路を大方は二里餘りも來たら、山は自ら左右に逼つて、脚下に奔る潺湲の響も折れる程に曲る程に、あるはこ

大原女

春はものの句　漱石の句に、「春はものの句になり易し古短册」といふがある。

高野川　賀茂川の一支流。京都府愛宕郡大原村より發し南流して京都市の北で賀茂川に入る。

なた、あるはかなたと鳴る。山に入りて春は更けたるを、山を極めたらば春はまだ殘る雪に寒からうと、見上げる峯の裾を縫うて暗き陰に走る一條の路に、爪先上りなる向うから大原女が來る、牛が來る。京の春は長く且靜かである。

保津川

岸は二三度うねりを打つて、音なき水を、停る暇なきに、前へ前へと送る。重なる水の甃つて行く頭の上には、山城を屏風と圍ふ春の山が聳えて居る。逼りたる水は已むなく山と山の間に入る。帽に照る日の忽ちに影を失ふかと思へば、舟は早くも山峽に入る。保津の瀨はこれからである。

「いよ〳〵來たぜ。」と、宗近君は船頭の體を透かして、岩と岩の逼る間を半町の向うに見る。水はどうと鳴る。

「成程。」と、甲野さんが舷から首を出した時、舟ははや瀨の中

大原女　京都府愛宕郡大原の里から物賣に京へ來る女。

保津川　京都府北桑田郡の山中に發し曲折して亀岡に到り桂川となり、遂に淀川に入る。

に滑り込んだ。右側の二人は、すはと波を切る手を緩める。櫂は流れて舷に着く。舳に立つは竿を横たへたまゝである。傾いて矢の如く下る舟はどゝゝと刻み足に、船底に据ゑた尻に響く。壞れるなと氣が附いた時は、もう走る瀨を脫けだしてゐた。

保津川

「あれだ。」と宗近君が指さす後を見ると、白い泡が一町ばかり逆落しに嚙合つて、谷を洩れる微かな日影を萬顆の珠と我勝ちに奪ひ合つてゐる。

「壯んなものだ。」

と、宗近君は大いに御意に入つた。

「夢窓國師とどつちがいゝ。」

「夢窓國師より此方の方がえらいやうだ。」

船頭は至極冷淡である。松を抱く巖の落ちんとして、落ちざるを苦にせぬやうに、櫂を動かし來り、棹を操り去る。通る瀨は樣々に廻る。廻る毎に新たなる山は當面に躍り出す。石山・松山・雜木山と數ふる遑を行客に許さざる疾き流は、舟を驅つて又奔湍に躍り込む。

大きな圓い岩である。苔を疊む煩はしさを避けて、紫の裸身に擊附けて散る水沫を、春寒く腰から浴びて、綠崩るゝ眞中に舟こそ來れと待つ。舟は矢も楯も物かは、一途に此の大岩を目懸けて突きかゝる。渦捲いて去る水の、岩に裂かれたる向うは見えず、削られて坂と落つる川底の深さは幾段か。乘る人のこなたよりは不可思議の波の行末である。岩に突當

夢窓國師　禪僧疎石。京都、天龍寺の開山。正平六年(一三〇一)寂、年七十七。

つて碎けるか、捲込まれて見えぬ彼方に、どつと落ちて行くか。——舟は只まともに進む。

「當るぜ。」と、宗近君が腰を浮かした時、紫の大岩は早くも船頭の黑い頭を壓して突つ立つた。船頭は「うん。」と舳に氣合を入れた。舟は碎けるほどの勢に、波を呑む岩の太腹に潛り込む。横たへた竿は取直されて、肩より高く兩の手が揚ると共に、舟はぐうと廻つた。此の獸奴と突離す竿の先から、岩の裾を尺も餘さず斜に滑つて、舟は向うへ落ち出した。

「どうしても夢窓國師より上等だ。」

と、宗近君は落ちながら云ふ。

急灘を落ち盡くすと、向うから空舟が上つてくる。竿も使はねば、櫂は無論の事である。岩角に突つ張つた懸命の拳を收めて、肩から斜に盲縞を掠めた細引繩に、長々と谷間傳ひを

根限り戻舟を牽いて來る。水行く外に、尺寸の餘地だに見出し難き岸邊を、石に飛び、岩に這うて、穿く草鞋のめりこむまで腰を前に折る。だらりと下げた兩の手は、塞がれて注ぐ渦の中に指先を浸すばかりである。うんと踏ん張る幾世の金剛力に、岩は自然と擦減つて、引懸けて行く足の裏を安々と受ける段々もある。長い竹を此處彼處と岩の上に渡したのは、牽綱をわが勢に逆らはぬほどに疾く滑らす爲の策と云ふ。

「少しは穩かになつたね。」

と、甲野さんは左右の岸に眼を放つ。踏む角も見えぬ切つ立つた山の遙かの上に、鉈の音が丁々とする。黑い影は、空高く動く。

「丸で猿だ。」

と、宗近君は咽喉佛を突きだして峯を見上げた。

「慣れると何でもするもんだね。」

と、相手も手を翳して見る。

「あれで一日働いて幾らになるんだらう。」

「幾らになるかな。」

「下から聞いて見ようか。」

亂れ起る岩石を左右に縈る流は、抱くが如く、そと割れて、半ば碧を透明に含む光琳波が、早蕨に似たる曲線を描いて、岩角をゆるりと越す。河は漸く京に近くなつた。

「その鼻を廻ると嵐山どす。」

と、長い竿を舷のうちへ挿込んだ船頭が云ふ。鳴る櫂に送られて深い淵を滑るやうに脫けだすと、左右の岩が自ら開いて、舟は大悲閣の下に着いた。

（虞美人草）

光琳波　畫家尾形光琳の描きし波の形。

大悲閣　觀世音菩薩を安置せる堂宇。京都嵐山の中腹にある。閣中には本尊千手觀音を安置し、また大堰川疏鑿の功を遂げた角倉了以の像を祀る。

三小鳥

薄田泣菫

春の彼岸過ぎのことだつた。

どこをあてどともなく歩いてゐると、小さな草の丘に出て來た。丘は新芽を吹きだしたばかりの灌木に圍まれてゐて、なかに圓く取殘された空地に、かなり大きな櫻の老木が一つ立つてゐた。

それを見ると、私は思ひがけないところで、むかし馴染に出あつたやうな氣持で、邪魔になる灌木を押分けながら足を早めて、その樹の側に近寄つていつた。そして滑々した樹の肌をひとしきり手で撫でまはした後、私はそつと自分の背を幹にもたせかけた。

枝といふ枝はそれ〴〵、淺綠の若葉と爪紅をなした花のつぼみとを持つて、また蘇つて來た春の情熱に身悶えしてゐる。冬中眠つてゐた樹の生命はまた元氣よくめざめて、樹皮の一重下では、その力づよい脈搏と呼吸とが高く波うつてゐる。

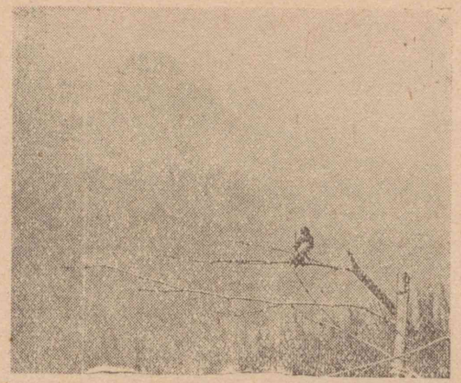
その道の學者のいふところによると、野中に立つてゐる一本の櫻の木は、一日に八百ポンド以上の水分を空中に向つて放散してゐる。普通の大きさの水桶でこれだけの水を運ばうとするには、まづざつと三十二度は通はなければならない。もしか人が地べたから樺のてつぺんまでそれを持運ぶとして、一度の上り下りに十分かゝるものとすれば、それだけの水を運んでしまふには、五時間以上も働かなければならぬことになるといつてゐる。

樺にしてさうだ。櫻にしてもさうでないとはいはれまい。とりわけ春は再び樹にかへつて來て、枝といふ枝は數知れぬ

薄田泣菫　名は淳介。詩人。明治十年生。

ポンド　一ポンドは約四百五十四瓦。

しなやかな葉を伸ばし、みづ〳〵しい花の咲いてゐる昨日今日、樹の内部では一瞬の休もなく、夥しい水分が根より吸上げられて、噴上げの水のやうなすばらしい力をもつて、幹から枝の先々にまで持運ばれてゐることだらう。――私はその激しい動



小鳥

搖を自分の背に感じて、思はず「春だな。」と、心のなかでさういつた。そして眼をあげて頭の上に垂れかゝつてゐる枝を見た。

その瞬間、深い紺色の空の彼方から小石のやうなものが一つ飛んで來て、ひよいと上枝にとまつて身輕に立ちなほつたのを見ると、それは一羽の小鳥であつた。鳥は黑繻子のやうな

をとつた、灰色の羽をしてゐた。私は名も知らないこの小さな遊び仲間を眼の前に迎へて、心より悅んだ。

むかし支那に焦澹園といふ儒者があつた。多くの學者のなかから擢でられて東宮侍講となつたが、あるとき進講してゐると、御庭の立木に飛んで來てちろ〳〵とすが〳〵しい聲で鳴く小鳥があつた。東宮は眼ざとくそれを見つけて、枝移りするその身輕い動作に心を奪はれてゐるらしかつた。それに氣がついた焦澹園は快からず思つて、いきなり進講をやめてしまつた。侍講の熱心な言葉が急に聞えなくなつたのに驚いた東宮は、自分の仕打に氣づいて、殘り惜しい思ひはしながらも、またもとのやうに居ずまひを直した。侍講はやつと安心したやうに再び講義を續けたといふことだ。

儒者焦澹園のつもりでは、かりにも聖賢の道を聞いてゐる途中で、東宮ともあらうものが小鳥の素振に氣をとられるなどとは怪しからぬことだ。といふにあるらしいが、しかし、ほんたうのことをいふと、東宮はいゝものを見つけたので、侍講は何をさしおいても、それをほめなければならない筈なのだ。堅苦しい聖賢の道を聞きながら、小鳥の流れるやうな音律に耳を傾け、潑剌たる動作に眼を奪はれるといふのは、規律と形式との生活のたゞ中にゐても、なほ自然を樂しまうとする自らな心を失はない證據で、侍講が今少し賢いか、今少し愚かかのどちらかであつて、東宮が小鳥に見とれてゐるのをそのまま見遁すことが出來たなら、この年若な貴公子は、聖賢の道を學ぶとともに、それよりももつと自由で、もつと明かるいものをも見つけることが出來ただらうと思はれる。そんな他人

のことを考へる暇があつたら、私は自分の見つけた小鳥と遊んだ方がよかつた。

小鳥は今、持前の身輕さで枝から枝へととんぼがへりを試みてゐる。私は思はず聲を出して笑つた。小鳥は臆面もなく、まだとんぼがへりを續けてゐる。見てゐるうちに、いつのまにか私の心もとんぼがへりをしてゐた。（艸木蟲魚）

枝から枝へ移るとすぐ、雀は必ずちつ、と啼きます。そのちつで冷たいピリオッドを點つてゆくのです。それで、たとへ姿は見えなくとも、一枝々々と移つて行く雀の動作が明瞭にわかります。

（北原白秋）

北原白秋　名は隆吉。詩人。明治十八年生。

四 望郷五月歌

佐藤春夫

塵まみれなる街路樹に
哀なる五月來にけり
石だたみ都大路を歩みつつ
戀しきや何ぞわが古里

あさもよし木の國の
牟婁の海山
夏みかんたわわに實り
橘の花さくなべに
とよもして啼くほととぎす

心して、な散らしそ、かのよき花を
朝霧か若かりし日の
わが夢ぞ
そこに狹霧らふ
朝雲か望郷の
わが心こそ
そこにいさよふ

空青し山青し海青し
日はかがやかに
南國の五月晴こそゆたかなれ
心も輕くうれしきに

佐藤春夫 文學者。明治二十五年生。

わが古里 和歌山縣新宮市。

木の國 材木の國の意。紀伊の國。南北牟婁二郡の他は和歌山縣に屬す。

牟婁 紀伊半島の東南端の地方。

海の原見はるかすとて
のぼり行く山邊の徑は
杉檜樟の芽吹きの
花よりもいみじく匂ひ
かぐはしき木の香薫じて
のぼり行く徑いくまがり
しづかにも昇る煙の
見まがふや香爐の煙
山賤が吸ひのこしたる
鄙ぶりの山の煙草の
椿の葉焦げて落ちたり
古の帝王たちも通はせし

尾の上の徑は果てを無み
ただつれづれに
通ふべききはにあらねば
目を上げてただに望みて
いそのかみふるき昔をしのびつつ
そぞろにも山を降りぬ

歌まくら塵の世をはなれ小島に
立ち騒ぐ波もや見むと
辿り行く荒磯石原
丹塗舟影濃きあたり
若者の憩へるあらば

海の幸鯨捕る船の話も聞くべかり
且つは聽け
浦の濱木綿幾重なす松の下かげ

いざさらば
心ゆく今日のかたみに
荒海の八重の潮路を運ばれて
流れよる千種百種
貝がらの數を蒐めて歌にそへ
贈らばや都の子等に

（春夫詩鈔）

濱木綿　石蒜科の多年生草本。暖國の海濱に生じ、佳香ある白色の花をつける。

五　緑の感覺

川島理一郎

緑の感覺はすべての色の中で、恐らく最も快いものであらうと考へる。活々とした感情、新鮮な感覺を拒む人はゐないのと同じく、緑の美しさを拒否する人はないはずである。それは、緑が青春の歡喜と五月の清新との全き象徴であるにほかならない。

青は緑の主調である。青が次第に赤に近づけば、やがて紫りになる。その意味で青の正反對は赤であると考へられるが、この二つは事實は甚だ密接な關係を持つてゐる。分子の轉位で、赤が青になり、青が赤になることが稀ではない。青い葉の中に、赤い蕊があることがあるが、この蕊はやがて青になるのである。熱帶植物になると、これが特にはつきりして、眞

川島理一郎　洋畫家。明治十九年生。

紅の莖に青い葉のついてゐるものがあり、また青い莖に赤い花が咲いてゐる場合もある。この二つの關係は色彩の感覺の上から見て非常に面白いと思ふが、とにかく青が常に成長を示す最初の色であることはこの點からいつても間違ひはない。更に綠に至つてはその上に、新鮮さと、潑剌さとを惠まれてゐる。

綠の持つ美しさは、もちろん新綠につきる。綠そのものが既に清新な感じを持つてゐる上に、冬の暗い色が忽ち新綠によつて甦へるやうに冴えぐ〳〵と輝くのであるから、綠の魅力は、新綠によつて最も效果的であるといはれなければならない。新綠こそ、綠の最も生彩ある表現である。

新綠の美を探ることは甚だ容易である。ひとたび眼を窓外に離せば、至るところに新綠が見られる。別に鬱蒼たる森林に入らなくても、青々した原野に出でなくともよいのである。路傍の雜草にも新綠の香りがあり、庭の隅の一本の紅葉にも新綠が映えてゐる。綠の感覺が青春を意味するのと等しく新綠が常に人間の傍近くゐて、或は話しかけ、或は微笑んでくれることは、人生にとつて如何ばかり意義あることであらう。

新綠はまたさん〳〵と降りそゝぐ五月の太陽の下でよく、そぼ降る五月雨の下で美しい。日光に當ると輝きを增し、雨にぬれると更に鮮かになる。折重なつて繁つてゐる木々の新綠を見ると、それは凡ゆる色を集めたよりも多彩であり微妙であり、變化に富んでゐることが判るのである。

日本の新緑と西洋の新緑を比較して見るのも面白い。もちろん新緑そのものに格別の相違があり得るはずもないが、西洋の新緑は日本より長く續くのである。夏の最中になると日本の新緑は黒くなつてしまふが、緯度が北に寄つてゐるイギリス、フランスでは眞夏の太陽を受けても緑が燒けないのである。そのために、眞夏になつても未だ新緑のまゝである。或は黄色のまゝのがあり、薄いのがあり、濃いのもある。日本のやうに直ぐ一色になつてしまふのと違つて、いつまでも變化の多い緑であることは、新緑鑑賞者にとつては大いに有難いわけである。

パリの新緑の候は、マロニエの新芽の出る時に始まる。短毛の筆のやうなその新芽がふくらんで來る頃には、自分たちまでが元氣になるやうな氣がするのである。その芽が開い

マロニエ 殼斗科の落葉喬木で、街路樹として用ひらる。

て四つ、五つの小さい葉になり、葉が開いて小さい蕾が出ると、恰度五月半ばで、マロニエの花盛りといふことになる。花は白、薄桃色、藤色と、色とりどりであるが、新緑の葉の色は、更に鮮かであつて、實に何ともいへない爽快な氣分に引入れられてしまふ。マロニエの新緑は月の光を受けてゐる時がまたこよなく美しい。これは一寸日本では味はへない氣分であるやうに思ふ。

パリで、新緑を樂しめるところは無數にあるが、ボアの公園や、セーヌの河岸の並木道の新緑は、到底忘れ得ないものである。ロンシャンやオートイユの競馬場の見渡す限り廣々と延びてゐる新緑のローンも爽快である。殊にそれが流行の粹を凝してゐる社交界のレディス・エンド・ジェントルメンを點景にしてゐる時、更に一層魅力的であることはこゝにいふ

ボアの公園 パリ市西方に在る大公園。
セーヌ パリー盆地の一大河にして、パリ市を貫きイギリス海峡に注ぐ。
ロンシャン ボア公園内の大競馬場。
オートイユ 同じく競馬場。
ローン 芝生。

までもない。シャンゼリゼーの大通りからアブニュー・ド・ボアにかけ、春の日曜と稱して朝の十一時から午後二時ごろまで、パリの着飾つた人達が擧つて、漸く芽をふき出した並木道を出歩くのが年中行事になつてゐるが、これは一種の流行衣裳の展覽會であつて、有名な衣裳店からは、その年の流行の着物を着せたモデルを練り歩かせるし、一方それを見るための貸椅子が人道の上に並べられてゐるといふ有樣で、一種の壯觀を呈するのである。

パリの新綠に引きかへ、ニース邊りの新綠はそれほどに思へない。それといふのはニースは年中餘りに綠に惠まれ過ぎてゐるからである。熱帶にも四季があるやうに、勿論ニースにも四季の移り變りはあるが、何といつても常夏の土地で

シャンゼリゼー パリ市の中心街。

ニース フランス南部の海邊に在り、風光明媚なる避寒地。

あつて、目立つた變化は見られない。日本の新綠さへ短いと見る眼からいへば、甚だつまらない新綠であるといはなければならない。新綠そのものの冴えはあるが、新綠の地としては擧げられないやうに思ふ。

新綠の美しさは結局冬の暗い色から急テンポに飛躍するところにある。從つて南國の新綠よりも概して溫和な氣候の土地の新綠の方が面白いやうである。多彩な變化によつて、新綠を凡ゆる角度から見られるのが有難いのである。私は臺灣の新綠も見たが、全體としては、いさゝか感じが强過ぎたやうに思つた。たゞ鳳凰木と橄欖樹の新綠は噂に違はず、流石に美しかつた。

綠は自然を現すのに最もふさはしい色である。從つて綠

テンポ 速度。調子。

橄欖樹 橄欖科の常綠喬木。

を好んで用ひるのは風景畫家に多いやうである。バルビゾン派の人々は、先づその筆頭に擧げられるであらうが、コローにせよテオドルールソーにせよ、デュプレー・ドウビニー・トロワイヨン等の人々は、何れも綠を愛した人々である。たゞ今日のわれ〳〵の感じるやうに綠の特質を冴えた色で現してゐないのは、努めて生々しさを避けようとした作畫態度からであり、また中世紀の傳統を引繼いでゐた當時の技法が、下繪の調子を先につけてゐて、その上に綠を載せていつたといふやうなところにもその理由を見出し得られる。

私は元來、綠には特に深い興味を持つてゐる。特に綠の研究を始めてからも久しい。その間セーヌの川岸や、ボアの公園に新綠を描きに出かけたことは數知れないほどあつた。

バルビゾン派　十九世紀中葉のフランスに於ける自然風景畫家の一群に與へられたる名稱。

コロー　(1796—1875).

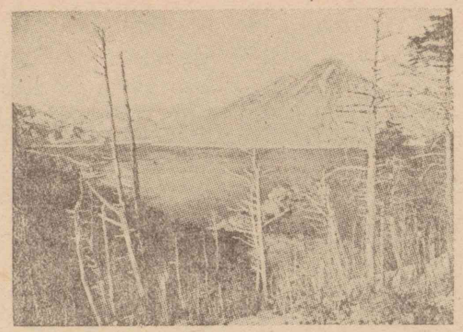
テオドル・ルソー　(1812—1867).

デュプレー　(1811—1889).

ドウビニー　(1817—1878).

トロワイヨン　(1810—1865).
總べて十九世紀のフランスの畫家。

歸朝後もこれを延長して曾て日光に取材した作品を作り、近ごろはまた住居の近くの池上の森を描いてゐる。日光を描きに行つた時、細かに日本の新綠を見たが、日光邊だと高い所へ行くと、殆ど西洋と同じだといふことが判つて興味があつた。中禪寺の傍へ行くと、白樺などがあつて、大分北歐の感じに近いものがあるやうに思つた。新綠の期間が長いのもフランス邊と同じであるし、殊に大平あたりの新綠は、木の姿までがボアそつくりなのに、むしろ驚いてしまつたのである。



日光中禪寺附近

（旅人の眼）

日光　栃木縣上都賀郡の町。附近一帶は國立公園に含まる。

池上　東京市大森區内。

中禪寺　中禪寺湖。日光山中、男體山の南西麓にあゝ湖。華嚴滝の水源にして、周圍二十五粁。

大平　大平山。中禪寺湖を挾んで男體山と對し、海拔一九七〇米。

六 うひ山ふみ

本居宣長

おの〳〵好むすぢによりてまなぶに、又おの〳〵その學びやうの法も、教ふる師の心々、まなぶ人の心々にて、さま〴〵あり。かくて學問に心ざして、入りそむる人、始めより、みづから思ひよれるすぢありて、その學びやうも、みづからはからふもあるを、又さやうにとりわけてそれと思ひよれるすぢもなく、まなびやうも、みづから思ひとれるかたなきは、物しり人につきて、いづれのすぢに入りてかよからん、又うひ學びの輩のまなびやうは、いづれの書よりまづ見るべきぞなど、問求むる、これつねの事なるが、まことに然あるべきことにて、その學びのしなを正し、まなびやうの法をも正して、ゆくさきよこさまなるあしき方に落ちざるやう、又其の業のはやく成るべきやう、

本居宣長　鈴廼舍と號す。伊勢の人。賀茂眞淵の門より出で、國學四大人の一。享和元年（一八〇一）歿、年七十二。

うひ山ふみ　一卷。宣長の著。初學者の爲に國學の研究法を說きし書。寛政十年十月脫稿。

すべて功多かるべきやうを、はじめよりよくしたゝめて、入らまほしきわざ也。同じく精力を用ひながらも、そのすぢそのまなびやうによりて、得失あるべきこと也。然はあれども、まづかの學びのしな〳〵は、他よりしひて、それをとはいひがたし。大抵みづから思ひよれる方にまかすべき也。いかに初心なればとても、學問にもこゝろざすほどのものは、むげに小兒の心のやうにはあらねば、ほど〳〵にみづから思ひよれるすぢは、必ずあるものなり。又面々好むかたと、好まぬ方ともあり、又生まれつきて得たる事と、得ぬ事ともある物なるを、好まぬ事得ぬ事をしては、同じやうにつとめても、功を得ることすくなし。又いづれのしなにもせよ、學びやうの次第も一わたりの理によりて、云々してよろしと、さして教へんは、やすきことなれども、そのさして教へたるごとくにして、果してよき

ものならんや、又思ひの外にさてはあしき物ならんや、實にはしりがたきことなれば、これもしひては定めがたきわざにて、實はたゞ其の人の心まかせにしてよき也。詮ずるところ學問は、たゞ年月長く倦まずおこたらずして、はげみつとむるぞ肝要にて、學びやうは、いかやうにてもよかるべく、さのみかゝはるまじきこと也。いかほど學びかたよくても怠りてつとめざれば、功はなし。又人々の才と不才によりて、其の功いたく異なれども、才不才は、生まれつきたることなれば、力に及びがたし、されど大抵は、不才なる人といへども、おこたらずつとめだにすれば、それだけの功はある物也。又晩學の人も、つとめはげめば、思ひの外功をなすことあり。又暇のなき人も、思ひの外、いとま多き人よりも、功をなすもの也。されば才のともしきや、學ぶ事の晩きや、暇のなきやによりて、思ひくづれを

れて、止むることなかれ。とてもかくても、つとめだにすれば、出來るものと心得べし。すべて思ひくづをるゝは、學問に大いにきらふ事ぞかし。

然れどもその教へかたも、又人の心々なれば、吾はかやうにてよかるべきかと思へども、さてはわろしと思ふ人もあるべきなれば、しひていふにはあらず。たゞ己が教によらんと思ばん人のためにいふのみ也。そはまづかのしな〳〵ある學びのすぢ〳〵、いづれも〳〵、やむことなきすぢどもにて、明らめしらではかなはざることなれば、いづれをものこさず、學ばまほしきわざなれども、一人の生涯の力を以ては、ことゞ〳〵くは、其の奥までは究めがたきわざなれば、其の中に主としてよるところを定めて、かならずその奥をきはめつくさんと、はじめより志を高く大いにたてて、つとめ學ぶべき也。然して其

の餘のしな〳〵をも、力の及ばんかぎり、學び明らむべし。

すべて學問は、はじめよりその心ざしを、高く大きに立てて、その奥を究めつくさずはやまじとかたく思ひまうくべし。此の志よわくては、學問すゝみがたく、倦み怠るもの也。道を學ぶを主とすべき子細は、今さらいふにも及ばぬことなれども、いささかいはば、まづ人として、人の道はいかなるものぞといふことを、しらであるべきにあらず。學問の志なきものは、論のかぎりにあらず。かりそめにもその心ざしあらむ者は、同じくは道のために、力を用ふべきこと也。然るに道の事をば、なほざりにさしおきて、たゞ末の事にのみ、かゝづらひをらむは、學問の本意にあらず。さて道を學ぶにつきては、天地の間にわたりて、殊にすぐれたる、まことの道の傳はれる、御國に生まれ來つるは、幸とも幸なれば、いかにも此のたふとき皇國

の道を學ぶべきは、勿論のこと也。

文義の心得がたきところを、はじめより、一々解せんとして、はゝとゞこほりて、すゝまぬことあれば、聞えぬところは、まづそのまゝにて過すぞよき。殊に世に難き事にしたるふし〳〵を、まづしらんとするは、いと〳〵わろし、たゞよく聞えたる所に、心をつけて、深く味はふべき也。こはよく聞えたる事也と思ひて、なほざりに見過せば、すべてこまかなる意味もしられず、又おほく心得たがひのありて、いつまでも其の誤をえさとらざる事ある也。此のこゝろふと思ひよりてよめる歌、筆のついでに、「とる手火も今はなにせむ夜は明けてほがら〳〵と道見えゆくを。」

博識とかいひて、隨分ひろく見るも、よろしきことなれども、さては緊要の書を見ることの、おのづからおろそかになる物

なれば、あながちに廣きをよきこととのみもすべからず。その同じ力を、緊要の書に用ふるもよろしかるべし。又これかれにひろく心を分くるは、たがひに相たすくることもあり。又たがひに害となることもあり。これらの子細をよくはからふべき也。

語釋とは、もろ〳〵の言の、然云ふ本の意を考へて、釋くをいふ。たとへば天といふはいかなること、地といふはいかなることと、釋くたぐひ也。こは學者の、たれもまづ知らまほしがることなれども、これにさのみ深く心を用ふべきにはあらず。こは大かたよき考へは出來がたきものにて、まづはいかなることとも、しりがたきわざなるが、しひてしらでも、事かくことなく、しりてもさのみ益なし。されば諸の言は、その然云ふ本の意を考へんよりは、古人の用ひたる所をよく考へて、云々の

言は、云々の意に用ひたりといふことを、よく明らめ知るを要とすべし。言の用ひたる意をしらでは、其の所の文意聞えがたく、又みづから物を書くにも、言ひやうたがふこと也。然るを今の世古學の輩、ひたすら然云ふ本の意をしらんことをのみ心がけて、用ふる意をばなほざりにする故に、書をも解し誤り、みづからの歌文も、言の意、用ひざまたがひて、あらぬひがこと多きぞかし。

からぶみをもまじへよむべし。漢籍を見るも、學問のために益おほし。やまと魂だによく堅固まりて、動くことなければ、晝夜からぶみをのみよむといへども、かれに惑はさるゝうれひはなきなり。然れども世の人とかく倭魂かたまりにくき物にて、から書をよめば、そのことよきにまどはされて、たじろきやすきなちひ也。ことよきとは、その文辭を麗しといふ

にはあらず、詞の巧にして、人の思ひつきやすく、まどはされやすきさまなるをいふ也。すべてから書は、言巧にして、ものの理非を、かしこくいひまはしたれば人のよく思ひつく也。すべて學問すぢならぬ、よのつねの世俗の事にても、辯舌よくかしこく物をいひまはす人の言には人のなびきやすき物なるが、漢籍もさやうなるものと心得居るべし。

書をよむにたゞ何となくてよむときは、いかほど委しく見んと思ひても、限あるものなるに、みづから物の注釋をもせんと、こゝろがけて見るときには、何れの書にても、格別に心のとまりて、見やうのくはしくなる物にて、それにつきて、又外にも得る事の多きもの也。されば其の心ざしたるすぢ、たとひ成就はせずといへども、すべて學問に大いに益あること也、是は物の注釋のみにもかぎらず、何事にもせよ著述をこゝろがく

べき也。

すべて人は、雅の趣をしらではあるべからず。これをしらざるは、物のあはれをしらず、心なき人なり。かくてそのみやびの趣をしることは、歌をよみ、物語書などをよく見るにあり。然して古人のみやびたる情をしり、すべて古の雅たる世の有さまを、よくしるは、これ古の道をしるべき階梯也。然るに世間の物學びする人々のやうを見渡すに、主と道を學ぶ輩は、上にいへるごとくにておほくはたゞ漢流の議論理窟にのみかかづらひて、歌などよむをば、たゞあだ事のやうに思ひすてて、歌集などは、ひらきて見ん物ともせず、古人の雅情を、夢にもしらざるが故に、その主とするところの古の道をも、しることあたはず。かくのごとくにては、名のみ神道にて、たゞ外國の意のみなれば、實には道を學ぶといふものにあらず。さて又歌

をよみ文を作りて、古をしたひ好む輩は、たゞ風流のすぢにのみまつはれて、道の事をばうちすてて、さらに心にかくることなければ、よろづにいにしへをしたひて、ふるき衣服、調度などをよろこび、古き書をこのみよむたぐひなども、皆たゞ風流のための玩物にするのみ也。そも〳〵人としては、いかなる者も、人の道をしらではあるべからず、殊に何のすぢにもせよ、學問をもして、書をもよむほどの者の、道に心をよすることなく、神のめぐみのたふときわけなどもしらず、なほざりに思ひて過すべきことにはあらず。古をしたひたふとむとならば、かならずまづその本たる道をこそ、第一に深く心がけて、明らめしるべきわざなるに、これをさしおきて、末にのみかゝづらふは、實にいにしへを好むといふものにはあらず。さては歌をよむも、まことにあだ事にぞありける。のりなががをしへにしたがひて、ものまなびせんともがらは、これらのこゝろをよく思ひわきまへて、あなかしこ、道をなほざりに思ひ過すことなかれ。

こたみ此の書かき出つることは、はやくより、をしへ子どもの、ねんごろにこひもとめけるを、年ごろいとまなくなどして、聞過しきぬを、今は古事記傳もかきをへつればとて、又せちにせむるに、さのみもすぐしがたくて、物しつる也。には

かに思ひおこしたるしわざなれば、なほいふべき事どもの、もれたるなども多かりなんを、うひまなびのためには、いさかたすくるやうもありなんや。

いかならむうひ山ぶみのあさごろも淺きすそ野のしるべばかりも

本居宣長

（うひ山ふみ）

古事記傳　四十八卷　四十八册。宣長畢生の努力によりてなる古事記の註釋書。

七　有王島下り

さるほどに、鬼界が島の流人ども、二人は召還されて都へ上りぬ。今一人殘されて、憂かりし島の島守となりにけるこそうたてけれ。僧都の稚くより不愍にして召使はれける童あり。名をば有王とぞ申しける。鬼界が島の流人ども、今日すでに都へ入ると聞えしかば、有王鳥羽まで行向ひて見けれども、我が主は見え給はず。「如何に。」と問へば、「それはなほ罪深しとて、一人島に殘されぬ。」と聞きて、心憂しなども愚かなり。常は六波羅邊に佇みて聞きけれども、何時赦免あるべしとも聞出さざりければ、僧都の御女の忍びておはしける處へ參りて、「この瀬にも洩れさせ給ひて、御上りも候はず。今は如何にもして彼の島へ渡りて、御行方をも尋ね參らせばやと存じ候。

鬼界が島　今の鹿兒島縣大島郡の島。琉黄島ならんと云はる。

二人　丹波少將藤原成經。平判官康頼。

今一人　俊寛のこと。俊寛は寛雅の子。僧都に任ぜられ、法勝寺の執行となる。平清盛の專横を憤り、治承元年（一一七七）藤原成親等と結び、後白河法皇を奉じて兵を擧げんとし、露はれて、成經・康頼と共に鬼界が島に流され、終に治承三年歿す、年三十七。

六波羅　京都市賀茂川の東、五條・七條の間。今の下京區烏丸町。平家一門の邸あり。

御文賜はり候はむ。」と申しければ、姫御前なゝめならずに悅び、やがて書きてぞ賜うでける。暇を乞ふともよも許さじとて、父にも母にも知らせず、唐船の纜は四月・五月に解くなれば、夏衣たつを遲くや思ひけむ、三月の末に都を立ちて、多くの波路を凌ぎつゝ、薩摩潟へぞ下りける。薩摩よりかの島へ渡る船津にて、有王を人怪しめ、著たる物を剝取りなどしけれども、少しも後悔せず、姫御前の御文ばかりぞ人に見せじと、元結の中には隱しける。

さて商人船に乘りて、件の島へ渡りて見るに、都にて幽かに傳へ聞きしは事の數ならず。田もなし、畑もなし、里もなし、村もなし。おのづから人あれども、言ふ詞をも聞知らず。有王、島のものに行向ひて、「物申さむ。」といへば、「何事。」と答ふ。「これに都より流されさせ給ひたる法勝寺の執行俊寛僧都と申

唐船　支那に通商する船。

法勝寺　今の京都市

す人の御行末や知りたる。」と問ふに、法勝寺とも執行とも、知りたらばこそ返事はせめ、たゞ頭を振りて、「知らぬ。」といふ。その中に或者が心得て、「いさとよ、さやうの人は三人これにありしが、二人は召還されて都へ上りぬ。今一人殘されて、あそこ〳〵と迷ひありきしが、その後は行方をも知らず。」とぞいひける。山の方の覺束なさに、遙かに分入り、峯に攀ぢ、谷に下れども、白雲跡を埋めて往來の道も定かならず。晴嵐夢を破りては、その面影も見えざりけり。山にては終に尋ねも遇はず、海の邊について尋ぬるに、沙頭に印を刻む鷗、沖の白洲にすだく濱千鳥の外は、跡問ふ者もなかりけり。

或あした、磯の方より蜻蛉などの如くに痩せ衰へたる者、よろぼひ出で來たり。もとは法師にてありけりと覺えて、髮は空樣におひ上り、萬づの藻屑取りつけて、荊棘を戴きたるが如

左京區岡崎町にありし天台宗の寺。承暦元年(一〇七七)白河天皇の創建にかかり、應仁の亂以後廢絶す。

白鷺云々 和漢朗詠集に紀齊名、「山遠クシテ雲ハ行客ノ跡ヲ埋メ。松寒ウシテ風ハ旅人ノ夢ヲ破ル。」、**沙頭云々** 同じく後江相公、「沙頭ニ印ヲ刻ム鷗ノ遊ブ處、水底ニ書ヲ摸ス雁ノ度ル時。」

し。繼目あらはれて皮ゆたひ、身に著たるものは絹・布のわきも見えず、片手には荒海布を持ち、片手には魚を貫ひて持ち歩むやうにはしけれども、はかも行かず、よろ〳〵としてぞ出で來たる。都にて多くの乞丐人は見しかども、かゝる者は未だ見ず。知らず、われ餓鬼道などへ迷ひ來たるかとぞ覺えたる。

はや、かれもこれも次第に歩み近づく。若しかやうの者にても我が主の御行方や知りたると、「物申さむ。」といへば、「何事。」と答ふ。「これに都より流され給ひたりし法勝寺の執行俊寛僧都と申す人やましまし。」と問ふに、童こそ見忘れたれども、僧都はいかでか忘れ給ふべきなれば、「これこそそれよ。」と宣ひもあへず、手に持てる物を投棄てて沙の上にぞ倒れ伏す。さてこそ我が主の御行方とは知つてけれ。僧都やがて消入り給ふを、有王膝の上に搔きのせ奉り、「多くの波路を凌ぎつゝ、

遙々これまで尋ね參りたるかひもなく、如何に、やがて憂目を見せむとはせさせ給ひ候ぞ。」と、さめ〴〵とかき口説きければ、僧都少し人心地出で來、扶け起され、「誠に汝多くの波路を凌ぎつゝ、遙々とこれまで參つたるこそ神妙なれ。たゞ明けても暮れても、都の事をのみ思ひ居たれば、戀しき者どもの面影を夢に見る折もあり、又幻に立つ時もあり。身もいたく疲れ弱りて後は、夢も現も思ひわかず。今汝が來たるをもたゞ夢とのみこそ覺ゆれ。若し此の事の夢なりせば、覺めての後は如何にせむ。」有王「こは現にて候なり。さてもこの御有樣にて、今まで御命の延びさせ給ひたるこそ不思議には覺え候へ。」と申しければ、「いさとよ、これは去年少將や判官入道が迎への時、その瀨に身をも投ぐべかりしを、よしなき少將の、『今一度都の音信をも待てかし。』など慰め置きしを、愚かに若しやと

去年　治承二年。
少將　成經をさす。
判官入道　康賴をさす。

賴みつゝ、永らへむとはせしかども、此の島には人の食物も絶えてなき處なれば、身に力のありしほどは、山に登りて硫黃といふ物を取り、九國より通ふ商人に遇ひ、食物に換へなどせしかども、日に添ひて弱り行けば、今はさやうの業もせず、かやうに日の長閑なる時は、磯に出でて網人・釣人に手を摺り膝を屈めて魚を貰ひ、汐干の時は貝を拾ひ荒海布を取り、磯の苔に露の命を懸けてこそ、憂きながら今日までは永らへたれ。これにて何事をもいはばやとは思へども『いざ、我が家へ。』と宣へば、有王「あの御有樣にても家を持ち給へる不思議さよ」と思ひ、僧都を肩に引懸け參らせ、教に從ひて行く程に、松の一叢ある中に、より竹を柱とし、蘆を結ひて桁・梁にわたし、上にも下にも、松の葉をひしと取懸けたれば、雨風溜るべくも見えざりけり。

僧都、こは現にてありけりと思ひ定めて、「去年、少將や判官入

九國　九州。

道迎への時も、これらが文といふ事もなし。今又、汝が便りにも、かくとも言はざりけりな。」と宣へば、有王、涙に咽びうつ伏して、暫しは御返事にも及ばず。やゝありて起上り、涙を抑へて申しけるは、「君の西八條へ出でさせ給ひし後、官人参りて資財・雑具を追捕し、御内の者ども搦め取り、御謀叛の次第を尋ね問ひ、皆失ひ果て候ひき。北の方は稚き人を隠しかね参らさせ給ひて、鞍馬の奥に忍びて御渡り候ひしにも、此の童ばかりこそ時々参りて、御宮仕仕り候なり。いづれも御歎の愚かなる方は候はねども、中にも稚き人は、餘りに戀ひ参らさせ給ひて、参り候度毎に、『如何に有王よ。我を鬼界が島とかやへ具して参れ。』と宣ひて、むづからせ給ひしが、過ぎ候ひし二月に瘡と申す事に失せさせおはしまし候ひぬ。北の方は其の御歎と申し、又此の御事と申し、一方ならぬ御物思に思召し沈ま

西八條　京都八條の北にありし清盛の邸。
官人　檢非違使廳の役人。
鞍馬　京都府愛宕郡鞍馬村。京都市の北方。

せ給ひて、打伏させ給ひしが、去ぬる三月二日の日、遂にはかなくならせ給ひて候ひぬ。今は姫御前ばかりこそ、奈良の姨御前の御許に忍びておはしけれ。それより御文賜ひて参りて候。」とて、取出でて奉る。僧都、これを開けて見給へば、有王が申すに違はず書かれたり。奥には、「などや三人流されおはしますに、二人は召還されて候に、何とて一人殘されて、今まで御上りも候はぬぞ。あはれ、尊きも賤しきも、女の身ほどいひがひなきことは候はず。男の身にて候はば、渡らせ給ふ島へも、などか尋ね参らで候べき。この童を御供にて急ぎ上らせ給へ。」とぞ書かれたる。「これ見よ、有王よ。この子が文の書きやうのはかなさよ。『おのれを供にて急ぎ上れ。』と書きたることの恨めしさよ。俊寛が心にまかせたるうき身ならば、何とて此の島にて三年の春秋をば送るべき。今年は十二に

なると覺ゆるが、これほどにはかなくては、いかでか人にも見え、宮仕をもして、身をも助くべきか。」とて泣かれけるにぞ、人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ知られけれ。「この島へ流されて後は、暦もなければ、月日の立つをも知らず、只おのづから花の散り葉の落つるを見ては、三年の春秋を辨へ、蟬の聲麥秋を送れば夏と思ひ、雪の積るを冬と知る。白月・黑月の變り行くを見ては、三十日を辨へ、指を折りて數ふれば、今年は六つになると覺ゆる稚き者も、はや先立ちけるござんなれ。西八條へ出でし時、此の子が行かむと慕ひしを、やがて還らむずるぞと慰め置きしが、只今のやうに覺ゆるぞや。それを限りとだにも思はましかば、今暫くもなどか見ざらむ。親となり、子となり、夫婦の縁を結ぶも、皆この世一つに限らぬ契ぞかし。今は姫が事ばかりこそ心苦しけ

人の親云々　後撰集卷十五雜歌一に、藤原兼輔「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」

蟬の聲云々　和漢朗詠集卷上夏の部に李嘉祐、「千峯ノ鳥路ハ梅雨ヲ含ミ。五月ノ蟬聲ハ麥秋ヲ送ル。」

西八條云々　治承元年、平家を討たんとして事露はれ、西八條の門に召されし時のことをいふ。

れども、それは生身なれば、歎きながらも過さむずらむ。さのみ永らへて、おのれに憂き目を見せむも、我が身ながらつれなかるべし。」とて、食事を止め、偏に彌陀の名號を唱へ、臨終正念をぞ祈られける。有王渡りて二十三日と申すに、僧都庵の中にて、遂に終り給ひぬ。年三十七とぞ聞えし。

有王、空しき姿に取りつき奉り、天に仰ぎ地に俯し、心の行くほど泣きあきて、「やがて後世の御供仕るべく候へども、この世には姫御前ばかりこそ渡らせ給ひ候へ。後世弔ひ參らすべき人も候はず。しばしながらへて御菩提を弔ひ參らすべし。」とて、寢處を改め、庵を切りかけ、松の枯枝、蘆の枯葉をひしと取りかけて、藻鹽の煙と爲し奉り、荼毗事をへぬれば、白骨を拾ひ、首にかけ、又商人船の便りにて、九國の地にぞ著きにける。

それより僧都の御女の忍びておはしける御許に參りて、あ

りし様を始より細々と語り申す。「なか〳〵文を御覽じてこそ、いとゞ御思は增さらせ給ひて候ひしか。件の島には硯も紙もなければ、御返事にも及ばず、思召されつる御事どもは、さながら空しくて止み候ひぬ。今は生々世々を送り、他生曠劫をば隔て給ふとも、いかでか御聲をも聞き、御姿をも見參らせ給ふべき。たゞ如何にもして御菩提を弔ひ參らせ給へ」と申しければ、姫御前、聞きもあへ給はず、伏しまろびてぞ泣かれける。やがて十二の年尼になり、奈良の法華寺に行ひすまして、父母の後世を弔ひ給ふぞあはれなる。有王は俊寛僧都の遺骨を首にかけ、高野へのぼり、奥の院に納め、法師になりて、諸國七道修行して、主の後世をぞ弔ひける。

かやうに人々の思ひなげきの積りぬる平家の末こそおそろしけれ。

（平家物語）

法華寺 奈良縣奈良市法華寺町にある眞言宗西大寺所屬の尼寺。

七道 東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海の七道。

平家物語 普通は十二卷に劍卷・灌頂卷の二卷を加ふ。平家の勃興より滅亡までを記せる敍事的文學にて史傳と見るべきも、平家琵琶の立場より云へば、說話としての「語り物」。作者不詳。

八雨の興

松平定信

「月の夜半こそ思ふ隈もなく、心の底も澄渡りぬるものなれ。されど闇の夜の空晴れて、星の光さやかなるに、風高く吹きかふは、又まさりぬるやうに覺ゆ。」といへば、「雨ぞいとまさりぬるを。」といふ。「いかに。」と問へば、「いでや旱天の雨は更なり、草木の花咲き實るも、皆この惠にこそあんなれ。又其の感情の深さをいはば、今日は元日なりけりといふに、雨そぼ降りて霞み渡りたるは、げに春かなとぞ思ふめる。師走の晦、のどやかに降りたるも、春待ち顏にていとをかし。すべて春は雨こそ長閑なれ。軒端より霞み渡りて、いとこまやかに降れるが衣うるほせども、降るとは見えず。軒の玉水も間遠に音して、住みすてし蜘蛛のいに玉ぬく景色、庭の面の枯生の底に、綠や

松平定信 字は貞卿。號は尤菴、後致仕して樂翁と改む。德川八代將軍吉宗の孫。白河の藩主。寛政時代の名老中。文政十二年（一八二九）歿、年七十二。

や添ひゆくも、柳の絲の動きもやらで露そふも、共にいと長閑なり。ともし火かゝげても、何となく光しめりたるに、鐘の音のほのかに響き來るも、心すみ渡りぬるものぞかし。その外、梅が香のしめり、夜深く匂ひ渡るも、花に憂しとかこちぬるも、哀はありけり。

春も老いゆく頃、蛙の時得顔にすだくもをかし。郭公の初音いかにと思ふ頃、村雨のはら〳〵とふり出でたるも、五月雨の幾日も降暮して、書の卷々繰返しつゝ居たれば、何となく世の中の事にも遠ざかりぬる心地ぞする。また暑さに堪へかぬる頃、雲のみなぎり出づる勢ありて、風一しきりふき落ちたるに、柳・蓮なんどの葉裏白く見せたるも涼し。やがて大きやかなる雨の間遠に落ちたるが、後には頻りに降來て物音も聞えず、土の匂ひ來るもいと心地よし。軒端は玉の簾かけたらんやうに、玉水の絶間なく落ちたるに、庭はひとつ湖となりて、あるは瀧落し、又は水走らせたるに、人々暫し物いはで打守りゐたるもをかし。やゝ雲薄くなれば、池の面には數ふるばかり雨見えて、小鳥など庭へをどり出でて餌拾ふさまなり。はじめ雲のたち出でし方は、はや空の一入綠に見えて、虹なんど見ゆるに、木々の綠の庭潦（にはたづみ）に影見ゆるもいと涼し。老いたる女など、雷の音に驚きて這出でたるが、今日のは若かりし時のごと、よく霽れにけり。今時のはかく霽るゝこと稀なりなんど、はや繰言いふもあり。彼はかくあわてしなどいひて、かたみに笑ひどよみつゝ、今日は蚊も少なかるべし。

松平定信自畫像

雷の音もいと微かなり。この頃の暑さも忘れぬとて、端近う出づれば、夕月の光さし渡りて、草木の露も玉なすに、肥えふくれたる蛙の、物待顔に空うちにらみて、ふつゝかなる音に鳴くもをかし。

秋來る頃の雨は、昨日に變りて何となう淋し。荻の上風、外山の鹿の音なんど、月よりも身にしむ心地ぞする。常に聞きなれし筧の水の音までも、あはれ深くこそ。月の前の村雨も亦をかし。まいて、やゝ夜寒の頃、鳴きからしたる蟲の音の、雨のをやみに幽かなる聲して、枕近く鳴きよるも哀なり。この雨に木々も染めなんと思へば、茸なども生ひいでなん、栗もはや落つべしなどと、わらはべのもの淋しげに燈火に向ひつゝ言出づるもげに樣々なり。夜深き鐘の音のうち濕るものから、さすがに秋は聲冴えて聞ゆるにぞ、今は世に亡き友の事も

思ひ出でて、鐘撞く人の心をもあはれと思ふばかり、感情はいと深かりけり。紅葉の染添ふも、白菊の移り行きてひとさかり見するも、尾花の露重げにうち萎れたるに、龍膽のうらみ深く咲きたるあたりもつきづきし。朝顔のみな枯れたる中に、ささやかに赤う咲出でたるが、晝過ぐるまでも凋みおくれたる、亦哀なり。野分の風はおどろ〳〵しきものから、雨は夕立に劣らざれど、さすがに哀を添ふるは、秋の習なるべし。時雨のさと音して、夕日に白く降りくるも、また音かへて枕とふもをかし。月よりも、闇の夜よりも、あはれ深きものには侍らずや。」といへば、「かうやうにいひ竝べては、げにもといふべからんが、一年も降る心地してよみ見れば、この雨はをとつ日よりふり出でしをと思ふ心はかはらじ。」と心の中に思ひて聞居しも、亦をかしかりけり。

（花月草紙）

花月草紙　松平定信の隨筆。

九　螢二題

石山

荻原井泉水

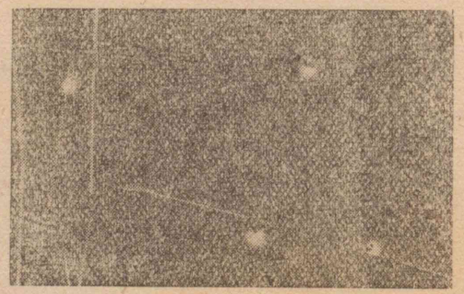
外は大分暗くなつて來た。日の永いさかりの一日は、暮れかけて來てからもなか〳〵に暮れきれず、京都・大阪邊から石山寺に參詣に來た人達が、其の門前から汽船の發着所まで、いろいろの色の蟻の列のやうに續いて居た。その列が暫く疎らになつたかと見ると、今度は、螢見物に來たらしい人々が、汽船場の方から逆に此方へ續いて來るのだつた。瀨田川の上には、淡い靄が漂ひはじめて、それがだん〳〵と薄墨色に染まつて來るものの、洲に生えてゐる青い葦や青い薄の明かるい色を、全く消し切るまで、和やかに時の進んでゆく景色を、私は二階から眺めてゐた。

荻原井泉水　名は藤吉。俳人。明治十七年生。

石山寺　今の大津市にあり。古來の名所。

瀨田川　琵琶湖より發して宇治川となるまでの間をいふ。

わが宿の浴衣の柄は螢の模樣であつた。お膳の汁椀には蒔繪で螢が描いてあつた。緣先の軒にさげた岐阜提灯もともされた。川に浮いてゐる屋根舟も灯をいれた。往來の人の白地の着物ばかりがぽつとして、もうすつかり夜に入つた。けれども、此の二階まで、螢は飛んで來さうにもない。それにこゝは餘り明かるすぎる。私は宿の下駄をつゝかけたまゝ外へ出て、籠に入れた螢を吊して賣つてゐる土產物屋の前を通つて、成るべく暗い方へ、木立の茂つてゐて人氣の少なさうなつまり螢の居さうな方へ脚をむけた。



螢

ふと、椎の花の強い匂が流れて來た。今頃の若葉のかをり

螢

は好い。其の中でも椎の若葉と共に其の花の匂は、惱ましい心を思はせる程に淋しい。而して強く迫るやうな感じを持つてゐる。私は、嘗て訪ねた事のある幻住庵の跡を思ひ出してゐた。

まづ頼む椎の木もあり夏木立

そこには、今も椎の木が多く、私が道を問うた百姓も、「あの椎の木の見える山がそれだ。」と、教へてくれた程であつた。

「石山の奥、岩間のうしろに山あり、國分山といふ。そのかみ國分寺の名を傳ふなるべし。麓に細き流を渡りて翠微に登ること三曲二百歩……」と芭蕉は「幻住庵記」に書いてゐる通り、此の石山から螢谷といふ所へ出て、西へ小徑をはひれば、十四五町の所で、其の庵こそ今はないが、その跡の空地が百坪ばかり、そこから見渡される風景と共に、其の頃の感じは確に今も

幻住庵　今の大津市にあり。蕉門の俳人菅沼曲翠の伯父幻住老人の結びし草庵。老人の歿後八年、芭蕉修理を加へてこゝに住すること半年。元祿三年四月こゝにて「幻住庵記」を作る。

まづ頼むの句　幻住庵記の末に出づ。

岩間・國分山　今の大津市にあり。

味はゝれるのであつた。「山は未申に峙ち、人家よきほどに隔たり、南薫峯よりおろし、北風海を浸して涼し。日枝の山、比良の高根より、辛崎の松は霞こめて、城あり、橋あり、釣垂るゝ舟あり。笠取に通ふ木樵の聲、麓の小田に早苗とる歌、螢とびかふ夕闇の空に水鶏のたゝく音、美景物としてたらずといふ事なし。」――芭蕉は庵の縁先に腰をおろして、靜かに暮れてゆく伽藍山の松の積翠を眺めてゐる。麓の人家が二三軒、ぽち〳〵と燈ともす。而して螢がすい〳〵と、湖の方から吹く風に流されて來る。そんな場面が連想される。いや、芭蕉の傍には、膳所から夕すゞみがてら師を訪ねて來た曲翠と正秀とが、團扇をはた〳〵と音させながら、先日、師を誘うて、瀨田川に螢を見た折の面白かつた事を話題にして、

螢見や船頭醉うておぼつかな

膳所　今の大津市にあり。

曲翠　菅沼氏。芭蕉の門人。膳所藩士。奸臣を斬つて自殺せり。

正秀　水田氏。膳所藩士。蕉門の達士。

といふ師の句が、其の興を云盡くしてゐる事などを語りあつてゐるさまなども、私には目の前に見えるやうな氣がした。

芭蕉が湖畔の粟津を去つて、石山の奥の幻住庵に隱れたのは、閑寂にひたりたいといふ氣持もあつたらうが、同人達の絶間のない來訪から稍遠ざかりたいといふ氣持もあつたらうと思ふ。然し、獨り山中にはひつて見れば、やはり人を懷かしがる芭蕉であつた。はる〳〵山中まで訪ねて來る同人達をいつまでも引きとめておきたく思ひ、彼等とても亦、師を殘して山を去るのが惜しまれるやうな氣がしたに違ひない。珍碩・丈草・千那などと、交る〳〵に庵を尋ねて來る門人等のうちで、私はなぜか乙州といふ人に親しみを感ずる。「藁からの家してやらむ雨蛙」といつた女らしい愛の深い智月を母として、彼も物やさしい心を持つた青年らしいからでもある。又、彼

曲翠の伯父なりといはる。享保八年(一七二三)歿す。

珍碩 濱田氏。近江瀬田の人。大阪に住して醫を業とせり。

丈草 内藤氏。尾張犬山藩の重臣。貞享元年、家を異母弟に讓り、禪門に入り、尋いで蕉門に入つて俳諧を學ぶ。粟津龍ヶ岡に庵を結ぶ。寶永元年(一七〇四)歿、年四十二。

千那 近江堅田本福寺十二世の住職。明式上人といふ。蕉門に入りて名あり。享保八年(一七二三)歿、年七十三。

乙州 大津驛長佐右衛門の子。母は智月尼。母子共に蕉門に學ぶ。

智月 近江大津の驛長佐右衛門の妻、乙州の母。蕉門に入り、才女の稱あり。寶永三年(一七〇六)歿、年七十四。

まりこ 靜岡縣安倍郡長田村。昔の東海道の宿驛。

が東へ旅をする時に芭蕉が「梅若菜まりこの宿のとろゝ汁」と餞別の句を送つた事にも、彼のうひ〳〵しさが想はれるからでもある。又、九月九日の夕、彼が酒の一樽を携へて來て、獨りゐる芭蕉を慰めたといふ話にも、彼の純情が好くあらはれてゐるからでもある。その時の芭蕉の挨拶は「草の戸や日暮れてくれし菊の酒」といふのであつた。けれども私がその乙州に親しみを感ずる心持は、

水くみに後や先なる螢かな

此の彼の句から一番に來る。それは幻住庵にての句である。彼は師の爲に薪水の勞を助けるといふ其の文字通りに、折々幻住庵に來ては山から薪を取つたり、水を汲んだりしてゐたと見える。其の水は、庵に近い八幡宮の社殿の裏を谷の方へ一町ばかり下りた所にある清水なので、杉の下の小徑が

暮れては暗くて、足もとも悪いであらうが、其の夜無くてはならぬ水と思つて、彼は汲みに行つたものと思はれる。その後になつたり、先になつたりして、飛んでゐる螢の一つ二つ――。脚もとを照すなどといふ理窟に合つた螢ではない。それを見るにつけて、すつかり暗くなつた事を一層感じさせるやうな螢なのだが、さればこそ彼のつゝましい氣持が美しい光となつて燃えてゐるやうな螢なのである。

その幻想の螢が、ふつと私の眼の前に現れて、ひらりと舞うて、向うへ飛んで行く。其の時、私は田のある道をあるいてゐた。田は新しい苗が植ゑられたばかりで、水は充分すぎる程有餘つて、道の上にまで溢れてゐるのが夜眼にも見えた。土橋があつた。月見草の花がぽつと白くにじんで、一むらの青薄ものびてゐた。私はそこに蹲んだ、ある露けさが感じられ

る事が快かつた。と、又、其の薄の茂みの中に隱れて一つの大きな螢がとまつてゐた。それは、深く潛んで己の心を澄ましてゐたいといふ隱遁者の姿を思はせた。それは、實に靜かに、安らかに、深い息をしてゐるといふ風にも見えた。獨り淋しく、その淋しさが燃えて、寶玉のやうな光を發してゐるのだとも思はれた。

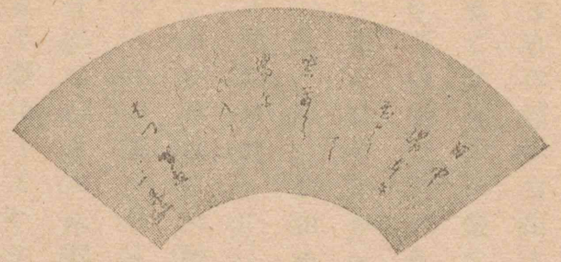
湯田中

「ほうたる來い。やまぶき來い！」

私の泊つてゐる宿の離座敷の裏が細い道になつてゐる。そこで子供が螢を呼ぶ唄をうたひ始めると、私は筆を措いて、夕方の散歩に出るのである。裏の細い道に添うて小川が音を立ててゐる。「かつけの湯」と書いた小さな共同湯がある。「旅の方おことわり」とも小さく書いてある。疎らに低い家が

湯田中　長野縣下高井郡山之内溫泉七湯の一。

續いて、ラムネや駄菓子を並べてゐる小店もある。背景には青く又綠に層々と連なる山並が、まだ暮れきらぬ儘に一入の趣がある。遠く一つ二つの灯も見えて、すべて田舍の溫泉場の村はづれの感じである。馬を曳いて戻つて來る馬子、篠竹を背に負うて來る人夫などが、ちらりほらりと通る中にまじつて、子供が螢を呼んでゐるのである。



此の湯田中といふ溫泉は、一茶の故鄕柏原に近いのと、溫泉宿の主人、希杖が其の門人であつた關係から、一茶はよくこゝへ遊びに來て逗留してゐたのである。で、彼の書いたもの、日記や原稿なども爰には多く遺されてゐる。其

挿繪　一茶筆讀田中湯本にやどりて　座敷から湯にとび入るや　はつ時雨　一茶

一茶　小林氏。名は信之、通稱彌太郎。俳人。信州の人。久しく江戸に住す。

柏原　長野縣上水内郡。

れを調べたり校訂したりする爲に、希杖から四代目の孫に當る此の宿の當主から招かれて、私は今、こゝに來てゐるのである。けふも一日、一茶が文政六年の日記を私は對校してゐた。

螢呼ぶうしろにとまる螢かな

此の句まで讀み合はせて來た時、「螢來い、やまぶき來い。」と子供の聲が聞えたのをしほに、私はやゝ倦んだ筆を措いて外へ出たのだつた。子供は五つ六つの男の兒が二人で、丁度「おらが春」の「蛙の野送」の條の一茶自身が寫した挿繪にあるのとそつくりの子供なのである。一茶の時分にも、やつぱりこんな子供がこんな唄をうたつて、爰で遊んでゐたに違ひない。私は此の溫泉へ、十年程以前から、數たび來てゐる。來るたびに、何處か古いものが毀されて新しいものが代つてゐることを見せられる。然しいつも變らないのは、此の山と川と、それ

おらが春　一卷。一茶の句文集。

蛙の野送　「おらが春」の「蛙の野送」の條を引く。

「爰らの子どもの戯に、蛙を生ながら土に埋めて、諷ふていはく、ひきどのおお死なつた。おんばくもつてとむらひに、とむらひにと、口々には

から子供達である。一茶も子供は好きだつた、而して彼はよく子供を詠つた。

わんぱくやしばられながら呼ぶ螢

そんな句のあつた事も思ひ出された。

私は柔かい、香しい暗さがだん〳〵に濃くなる中に、自らずんずんと踏込んで行きたいやうな氣持で、河原の方へ下りて行つた。それは、澁といふ溫泉の方から流れてくる川が廣い河原になつて、そこからも亦、溫泉が湧く。而して川柳が多く、自然に生えたものか、作つたものか、護岸の爲にもなれば、名產としての行李細工の原料ともなるといふが、其の川柳の葉風が涼しく、そこには螢も多くゐるらしいので、私の足も自然とそちらへ向いたのであつた。

七つ八つの女の子が裸で、三つばかりの是も裸の子を負う

やして、宋玫の葉を彼のうづめたる上に打ちかぶせて歸りぬ。云々」

澁　長野縣下高井郡山之内溫泉七湯の一。

て、其の後から裸の男の子が女の子の着物を小脇に抱へて、河原をやつて來る。其の向うに遠く家が二三軒見える、そこから來たのであらう。其の兒等がまがつて行く方には茶店らしい家が電燈をつけて、小さな瀧のやうな水音が聞える。そちらへ細い道がついてゐるので、私も行つて見た。「瀧の湯あり」——茶店の前には大きな板に斯う書いて、そこから少し離れた所に湯壺が出來てをり、二本の樋から溫泉が落ちてゐた。勿論、屋根もテントもなく、星もうつれば、螢もうつる湯壺なのである。私が今校訂してゐる一茶の書き捨てたものの中に、

貧しきものの子を養ふには湯のわく所にしくはあらじ。

夜のほの〴〵明けて、鳥の聲と等しくがば起きて、十ばかりなる兄は弟を負ひ、姉は妹を抱きつゝ、素足にて門を出れば、それに引きつゞきて、迹からも、其の迹からも走り走

りて、湯桁にとび入りつゝ、今玄冬素雪の頃さへ、丸裸にて狂ひ育ちに育つものから、自ら病氣なく、ふとくたくましく見ゆ。さるから其の親々の衣着せる思ひもうすかるべし。

これは半紙に走り書して、而も横に棒を引いて消してあるものだが、面白いので寫して置いた。

溫泉の緣の裸にとまる螢かな

此の句の情景が、生きて來る。

子供達はすつかり暗くなつた溫泉槽の中につかつて、ボチャボチャと遊んでゐた。私は其の側を通つて、流の方へ歩いて行つた。と、一點の光が明滅しながら、高く低く、靜かに私の前に來るのであつた。

大螢ゆらり〳〵と通りけり

一茶の其の句が、すぐ心に浮かんだ。大きな螢を「大螢」といふ事は、一茶風な無頓着な造語だと思つてゐたが、此の邊では大きな螢を指して、別にやまぶきと稱する事も、今度爰に來て知つてみれば、其の造語は無理には感じなくなつた。

「ほうたる來い、やまぶき來い！」

又しても子供の聲が聞える。河原の瀧の湯につかつてゐる兒等の聲であらう。

（旅の茶話）

市中や大骨折つてとぶ螢
人聲や大骨折つてとぶ螢
本町をぶらり〳〵と螢かな
本通りゆらり〳〵と螢かな

（一茶）

一〇 阿新丸

さるほどに、源中納言具行・右少辨俊基・日野中納言資朝、各、死罪に行はるべしと、評定一途に定まりて、まづ去年より佐渡國へ流されておはする資朝卿を斬り奉るべしと、その國の守護本間山城入道に下知せらる。

このこと京都へ聞えければ、この資朝の子息邦光の中納言、その頃は阿新殿とて、歳十三にておはしけるが、父の卿囚人になり給ひしより、仁和寺邊に隱れて居られけるが、父誅せられ給ふべきよしを聞きて、「今は何事にか命を措しむべき、父とともに斬られて冥途の旅の伴をもし、また最後の御有樣をも見奉るべし。」とて、母に御暇をぞ乞はれける。

母御、頻りに諫めて、「佐渡とやらんは、人も通はぬ怖しき島と

「さるほどに」
具行・俊基・資朝 共に後醍醐天皇に近侍し、正中の變に武家に捕へらる。源中納言具行は源師行の子、右少辨俊基は藤原種範の子、日野中納言資朝は藤原俊光の子なり。
去年 正中二年（一九八）。
仁和寺 山號は大内山。眞言宗の本山。京都市右京區御室にあり。
「人も通はぬ怖しき島」

こそ聞ゆれ。日數を經る道なれば、いかにしてか下るべき。その上汝にさへ離れては、一日片時も命存ふべしとも覺えず。」と泣悲しみて止めければ、「よしや伴なひ行く人なくば、いかなる淵瀨にも身を投げて死なん。」と申しける間、母、いたく止めなば又目の前に憂き別れもありぬべしと思ひ佗びて、力なく、今まで唯一人附副ひたる中間を相そへて、遙々と佐渡國へぞ下されける。路遠けれど乘るべき馬もなければ、履きも習はぬ草鞋に菅の小笠を傾けて、露分けわくる越路の旅、思ひやるこそ哀れなれ。

都を出でて十日あまりと申すに、越前の敦賀の津に着きにけり。これより商人船に乘りて、ほどなく佐渡國にぞ着きにける。人してかうといふべき便りもなければ、自ら本間が館に至りて、中門の前にぞ立ちたりける。折節僧のありけるが

敦賀 今の福井縣敦賀市。

立出でて、「この内への御用にて御立ち候か。またいかなる用にて候ぞ。」と問ひければ、阿新殿、「これは日野中納言の一子にて候が、この頃斬られさせ給ふべしと承りて、その最後の様をも見候はんために、都より遙々と尋ね下りて候。」といひもあへず、涙をはら〳〵と流しければ、この僧心ありける人にて、急ぎこのよしを本間に語るに、本間も岩木ならねば、さすがあはれにや思ひけん、この僧を以て持佛堂へ誘ひ入れて、蹈皮・行纏解かせ、足洗ひて、疎かならぬ體にてぞ置きたりける。

阿新殿、これを嬉しと思ふにつけても、「同じくは父の卿を疾く見奉らばや。」といひけれども、今日・明日斬らるべき人にこれを見せては、なか〳〵よみぢの障ともなりぬべし。また關東の聞えも如何あらんずらんとて、父子の對面を許さず、四五町隔たりたるところに置きたれば、父の卿はこれを聞きて、行

持佛堂 常に身に持ちて信仰せる佛像又は先祖の位牌などを安置する堂。

末も知らぬ都に如何あらんと思ひやるよりもなほ悲し。子はその方を見やりて、浪路遙かに隔たりし鄙の住居を思ひやりて、心苦しく思ひつる涙は更に數ならずと、袂の乾くひまもなし。これこそ中納言のおはします牢の中よとて見やれば、竹の一むら茂りたるところに堀ほり廻らし、塀塗りて、行通ふ人も稀なり。情なの本間が心や、父は禁牢せられ、子は未だ幼し、たとひ一所に置きたりとて、何程の怖れかあるべきに、對面をだに許さで、まだ同じ世の中ながら、生を隔てたる如くにて、亡からん後の苔の下、思ひ寢に見ん夢ならでは相見んこともありがたしと、互に悲しむ恩愛の父子の道こそあはれなれ。

五月二十九日の暮ほどに、資朝卿を牢より出し奉りて、「遙かに御湯も召され候はぬに御行水候へ。」と申せば、はや斬らるべき時になりにけりと思ひ給ひて、「嗚呼、うたてしき事かな。

「恩愛の父子の道」

五月二十九日 元弘二年（一九二）。

我が最後の様を見んために、遙々と尋ね下りたる幼きものを一目も見ずして果てぬることよ。」とばかり宣ひて、その後は曾て諸事につきて言葉をも出し給はず。今朝までは氣色しをれて、常には涙を押拭ひ給ひけるが、人間の事に於ては頭燃を拂ふ如くになりぬと覺りて、たゞ顯密の工夫の外は餘念ありとも見え給はず。夜に入れば、輿さし寄せて乘せ奉り、こゝより十町ばかりある河原へ出し奉り、輿舁きすゑたれば、少しも臆したる氣色もなく、敷皮の上に居直りて、辭世の頌を書き給ふ、

五蘊假成形、　四大今歸空
將首當白刃　截斷一陣風

年號・月日の下に名字を書きつけて、筆を擱き給へば、斬手後へ廻るとぞ見えし、御首は敷皮の上に落ちて、體はなほ坐せるが如し。このほど常に法談なんどし給ひける僧來て、葬禮形の如く取營み、空しき骨を拾ひて阿新に奉りければ、阿新これを一目見て、取る手もたゆく倒れ伏し、「今生の對面遂に叶はずして、變れる白骨を見ることよ。」と、泣悲しむも理なり。

阿新未だ幼稚なれども、健氣なる所存ありければ、父の遺骨をば、たゞ一人召使ひける中間に持たせて、「まづ我より先に高野山に參りて、奥の院とかやに納めよ。」とて、都へ歸し上せ、我が身は勞ることあるよしにて、なほ本間が館にぞ留りける。これ本間が情なく、父を今生にて我に見せざりつる鬱憤を散ぜんと思ふ故なり。かくて四、五日經けるほどに、阿新、晝は病のよしにてひねもす臥し、夜は忍びやかに拔出でて、本間が寢處なんど細々と窺ひて、隙あらば、かの入道父子が間に一人さし殺して、腹切らんずるものをと思ひ定めてぞ狙ひける。

顯密　佛教の語。顯教（釋迦・彌陀の教。即ち天台・華嚴・淨土・法華等）と密教（大日如來の教。即ち眞言）と。

「辭世の頌」

五蘊　色・受・想・行・識をいふ。即ち人間をさす。

四大　地・水・火・風をいふ。

高野山　和歌山縣伊都郡高野町にある金剛峯寺の山號。眞言宗古義派の本山。

奥の院　高野山上の東部。

或夜雨風烈しく吹きて、宿直する郎黨ども皆遠侍に臥したりければ、今こそ待つところの幸よと思ひて、本間が寢處の方を忍びて窺ふに、本間が運や强かりけん、今夜は常の寢處を變へて、いづくにありとも見えず。また二間なる處に燈の影の見えけるを、これは若し本間入道が子息にてやあらん、それなりとも討ちて恨を散ぜんと、拔き入りてこれを見るに、それさへ爰になくして、中納言殿を斬り奉りし本間三郎といふものぞたゞ一人臥したりける。よしやこれも時にとりては親の敵なり、山城入道に劣るまじと思ひて、走り掛らんとするに、我は元來太刀も刀も持たず、たゞ人の太刀を我が物と憑みたるに、燈殊に明かなれば、立寄らばやがて驚き合ふこともやあらんずらんと危みて、左右なく寄り得ず、如何せんと案じ煩ひて立ちたるに、折ふし夏なれば、燈の影を見て、蛾といふ蟲の數多

明障子に取付きたるを、すはや究竟のことこそあれと思ひて、障子を少し引きあけたれば、この蟲數多内へ入りて、やがて燈を打消しぬ。今はかうと嬉しくて、本間三郎が枕に立寄りて探るに、太刀も刀も枕にありて、主はいたく寢入りたり。まづ刀を取りて腰にさし、太刀を拔きて胸元に當て、寢たるものを殺すは死人をさすに同じければ、驚かさんと思ひて、まづ足にて枕をはたとぞ蹴たりける。蹴られて驚くところを、一の太刀に臍の上を疊までつと突通し、返す太刀に喉笛さし切りて、心靜かに後の竹原の中にぞ隱れける。

本間三郎が、一の太刀に胸を通されて、「あつ。」といふ聲に、番衆ども驚き騷ぎて、火を點してこれを見るに、血のつきたる小さき足跡あり。「さては阿新殿の仕業なり。堀の水深ければ、木戸より外へはよも出でじ。搜し出して打殺せ。」とて、手に

「心靜かに」

手に松明を點し、木の下、草の蔭まで、殘るところなくぞ搜しける。

阿新は竹原のなかに隱れながら、今はいづくへか遁るべき。人手に掛らんよりは、自害をせばやと思はれけるが、憎しと思ふ親の敵をば討ちつ。今はいかにもして命を全うして、君の御用にも立ち、父の素意をも達したらんこそ、忠臣・孝子の義にてもあらんずれ。若しやと一まづ落ちて見ばやと思ひ返して、堀を飛越えんとしけるが、口二丈、深さ一丈に餘りたる堀なれば、越ゆべきやうもなかりけり。されば、これを橋にして渡らんよと思ひて、堀の上に末靡きたる呉竹の梢へさら〳〵と登りたれば、竹の末、堀の向うへ靡き伏して、やす〳〵と堀をば越えてけり。夜はまだ深し、湊の方へ行きて、船に乘りてこそ陸へは着かめと思ひて、迚る〳〵浦の方へ行くほどに、夜もは

や次第に明け離れて、忍ぶべき道もなければ、身を隱さんとて、日を暮し、麻や蓬の生茂りたる中に隱れゐたれば、追手どもと覺しきものども、百四五十騎馳せ散りて、「若し十二三ばかりなる兒や通りつる。」と、道に行きあふ人ごとに問ふ音してぞ過行きける。

阿新丸（菊池容齋筆）

阿新その日は麻の中にて日を暮し、夜になれば、湊へと志して、そこともしらず行くほどに、孝行の志を感じて佛神擁護の眸（まなじり）をやめぐらされけん、年老いたる山伏一人行き逢ひたり。この兒の有樣を見て痛ましくや思ひけん、「これはいづくよりいづくをさして御渡り候ぞ。」と問ひけれ

ば、阿新事の樣をありのまゝにぞ語りける。山伏これを聞きて、我この人を助けずば、只今のほどにかはゆき目を見るべしと思ひければ、「御心安く思召され候へ。湊に商人船ども多く候へば、乘せ奉りて越後・越中の方まで送りつけ進らすべし。」といひて、足たゆめばこの兒を肩に乘せ、背に負ひて、程なく湊にぞ着きにける。

夜明けて、便船やあると尋ねけるに、折節湊の内に船一艘もなかりけり。如何せんと求むるところに、遙かの沖に乘り浮かべたる大船、順風になりぬと悅びて、檣を立て篷を捲く。山伏手を擧げて、「その船これへ寄せてたび給へ。便船申さん。」と呼ばはりけれども、曾て耳にも聞入れず、船人聲を帆に上げて、湊の外へ漕出す。山伏大きに腹を立て、柿の衣の露を結びて、肩にかけ、沖行く船に立向ひて、いらたか數珠を押揉みて、「明

聲を帆に上げて　「秋風に聲を帆にあげて來る船は天の戸渡る雁にぞありける」（古今集）

王の本誓誤らずば、その船此方へ漕返してたばせ給へ。」と、跳り上り跳り上り、肝膽を碎いてぞ祈りける。行者の祈、神に通じて、明王擁護やし給ひけん、沖の方より俄に惡風吹來りて、この船忽ち覆らんとしける間、船人どもあわてて、「山伏の御坊、まづ我等を御助け候へ。」と、手を合はせ膝を屈め、手に〳〵船を漕戻す。汀近くなりければ、船頭船より飛下りて兒を肩に乘せ、山伏の手を引き、屋形の内に入れたれば、風は元の如くに直りて、船は湊を出でにけり。

その後、追手ども百四五十騎馳せ來り、遠淺に馬を控へて、「あの船止れ。」と招けども、船人これを見ぬよしにて、順風に帆を揚げたれば、船はその日の暮ほどに、越後の國府にぞ着きにける。

（太平記）

太平記　四十卷。作者不詳。花園天皇の文保二年より後村上天皇の正平二十二年までの五十餘年間の戰亂に關するもの。

夕立

徳富蘆花

今日は早夕飯を食つて居ると、北から冷やりと風が來た。眼を上げると、果然々々、北に一團、紺青色の雲が立つて居る。其の紺青の雲を背にして、こんもりした隣家の杉や、樫の木立、孟宗竹の藪などが生々しい綠を浮かして居る。

「夕立が來るぞ。」

主人は大聲に呼んで、手ばやく庭の乾し物・履物などを片づける。裏庭では下婢が駈けて來て洗濯物を取入れた。

やがて食卓から立つた妻兒が下りて來た頃は、北天の一隅に埋伏して居た彼の濃い紺青色の雲が、倏忽の中にむら〳〵と湧立つて、何の艶もない濁つた煙色に化り、見る〳〵天空を這上り、大軍の散開するやうに、京に西に天心にずら〳〵と廣

徳富蘆花　名は健次郎。文學者。蘇峯の弟。昭和二年歿、年六十。

がつて來た。三人は芝生に立つて、驚嘆の眼を睜つて此の夥しい雨雲の活動を見た。

青空は南の一軸に卷蹙められ、煤煙の色をした雲の大軍は、其の青空をすら餘さじものをと南を指してひた押しに押寄せて居る。つい今しがたまで雨を戀しがつて居た乾き切つた眞夏の喘ぎは、何處へ往つたか、唯十分か十五分の中に、大地は恐しい雨雲の下に閉ぢこめられて、冷たい黯い冥府になつた。

雲の運動は秒一秒劇しくなつた。南を指して流るゝ雲、渦まく雲、眞黑になつて動かぬ雲、雲の中から生まるゝ雲、雲を摩つて移り行く雲、濃くなり淡くなり、淡くなり濃くなり、北から東へ、東から西へ、北から西へ、西から南へ、逆流して南から東へ、世界中の煙突といふ煙突をこゝに集めて、煤煙の限りなく湧

く樣に、眼を驚かす雲の大行軍の音響を聞かぬが不思議である。

彼等は驚異の眼を睜つて、此の活動する雲の下に魅せられたやうに佇んだ。冷たい風がすら〳〵つと顏に當る。紫の電光は時々ぱつ〳〵と天の半壁を輝かし閃く。近づく雷雨を感じつゝ、彼等は猶頭上の雲から眼を離し得なかつた。薄汚い煤煙色をした滿天の雲は、ます〳〵南に流れた。水の樣に、霧の樣に、煙の樣に、空は皆恐しい勢を以て動いて居る。仰ぎ見る彼等は、流るゝ雲に引きずられて、やゝもすれば、駈出しさうになる足を踏みしめ踏みしめ立つて居なければならなかつた。時々西の方で、或一處、雲が薄れて探照燈の光めいた生白い一道の明かりが斜に落ちて來て、深い〳〵井の底でも照す樣に、彼等と其の足下の芝生だけ明かるくする。彼等は

はつと驚惶の眼を見合はす。かく思ふと、怒れる神の額の如く、最早眞黑になつて居る。妻兒の顏は土色になつて居る。草木も人も息を屏めたかの樣に、一切の物音は、はたと絶えた。何處から來たか、犬のデカが不安の眼つきをして見上げつゝ、大きな體を主人の脚にすりつける。

空は到頭雲をかぶつて了つた。著しく水氣を含んだ北風が、ぱつ〳〵と頭を撲つて來た。やがて粒だつた雨になる。雷も頭上近くなつた。雲見の一群は急いで家に入つた。母屋の南面の雨戸だけ殘して、悉く戸をしめた。暗いのでランプをつけた。

ざあつと降出した。雷が鳴る。一庭の雨脚を凄まじく見せて、ぴかりと電が光る。ざあ〳〵と恐しく降出した。見る〳〵庭は川になる。雨が飛石をうつて刎ねかへる。

目に入る限りの青葉が一葉々々に雨を浴びて、嬉しさうにぞくぞく身を震はして居る。

「あゝ好いおしめりだ。」

斯う云つた彼等は更に、

「まだ七時前だよ、まあ。」

と下婢の云ふ聲に驚かされた。

夕立から本降になつて、雨は夜すがら續いた。

（みゝずのたはこと）

夕立や草葉をつかむむら雀　蕪村

夕立にうたるゝ鯉の頭かな　子規

蕪村　谷口氏。天明三年（一七八三）歿、年七十。一説に六十八。

子規　正岡氏。明治三十五年歿、年三十六。

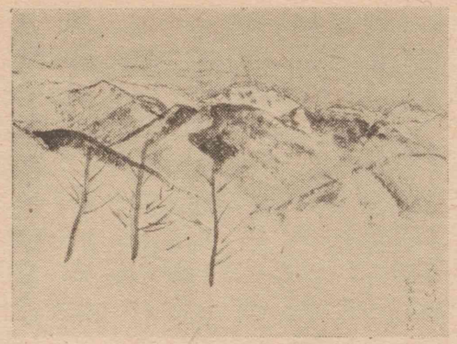
三　聖岳に登る

黒田初子

駿河の三尺峠を越えた時、銀色に輝いた聖岳の姿を見てから、眼底に燒きついたその莊嚴さは、どうしても登つてみずにはおけない氣持をもたらした。

この聖岳は南アルプスの名峯である。嚴かに而も優し味をもつて海拔三千十一米の高空に聳えてゐる。山又山、谷又谷の奥深い地勢のために登山の流行るこの頃でも登る人は少ない。

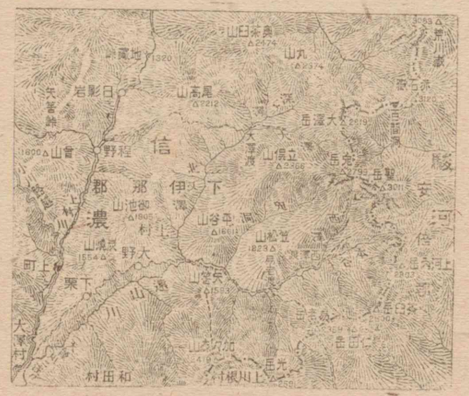
その登山の道順は、赤石嶽へ登り、尾根を縱走して百間洞で野營し、聖岳へ達するのが普通で



大日峠より聖を望む（黒田正夫スケッチ）

黒田初子　東京女子高等師範學校出身。黒田正夫夫人。明治三十六年生。

ある。その他に下伊那の和田から出て、加々森山の頂に登り、光岳・易老岳・仁田岳・茶臼岳・上河内岳と縱走をして聖岳に出る徑路があり、或は大井川を遡り、上河内岳から聖岳へ行くコースもある。又、天龍川の支流である遠山川の本谷を上つて、又は途中から尾根にとりついて、聖岳と上河内岳との鞍部にある聖澤の小屋に辿りつくことも出來る。遠山川の北股澤を遡つて大澤岳と兎岳の鞍部へ出て聖岳へ出る方法もあるが、この道は未だ數名の人の足跡を印したに過ぎない。私どものとつた西澤遡行は、土地の人も知らなかつた全くの初登攀であつた。



コース　經路。

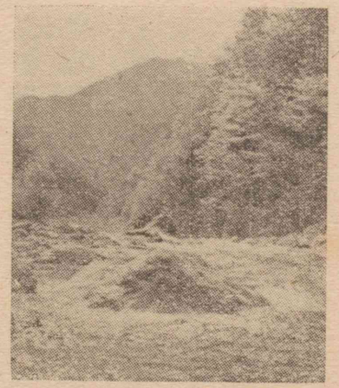
深い谷が右の下に望まれる。對岸は隙間もなく、綠の葉で被はれてゐた。目をあげれば、藍を流した空に丸みをもつた三角の山が二つ浮かび出てゐる。兎と聖である。あの二つの山に辿りつく爲に遙々やつて來たのだ。夕陽が尾根の平面を赤く照し、影になつた所との調和が如何にもキユビズムの畫を見るやうである。俄に山鳥が飛去つた。

私どもは今、天龍川から岐れて遠山川を遡り、最後の部落下栗に向つてゐるのである。暫くして井戸端といふ部落に著いた。こゝの舊家で泊めてもらふことになつた。夜に入つてから案内の男が二人來たので、爐端を圍んで、西澤を通つて聖岳に出たいと切出すと、口を揃へて「未だ人間は一人も通つたことが無い、非常な惡場つゞきで、殊に入口には瀧があり、通過は至難だ。」といふ。老いた熊吉は岩茸とりで、山八分から

キユビズム　立體派。

上なら稍自信があるがといひ、獵師の順一も西澤に下りたことは無いといふ。協議の末、四人の協力によつてこの西澤を通過してみようといふことになつた。

十五日、井戸端を出た。曲折した下り路の眞下には遠山川が波をたてて流れてゐる。水量の多いのが氣になつてならない。坂を下りきつて河原へ出ると、丸木橋が渡してある。永く水に浸つてゐたのか、つる〳〵してゐる。熊吉は渡りかけたが、その中程でよろ〳〵し始め、あはやと思ふ内に流に落ちた。漸く這ひあがつた時には、背に負つてゐた米や草鞋はすつかりぬれてしまつてゐた。



遠山川の渓流

四人　作者夫妻と案内者二人。

このあたりでは、蝨の襲來が甚だしくて立止ることも出來ない。河原の石の間に咲く富士薊の葉が南國風な感じを與へる。その擴がりの偉大さ、葉の刺の鋭さ。さては丸々とした白粉刷毛のやうな紅紫の花の色など、ゴーガンの畫が思ひ出される。石の蔭には蝮がとぐろを卷いてゐる。或は左岸に渡り、右岸に戻り、時には淵の上へ乘出してゐる岩壁を辿つて前進した。藤蔓にぶらさがつて通過したこともあつた。危險ををかす毎に順一は「西澤はこんなものではなからう。」と、昔から恐しいと聞かされてゐる未知の澤の想像を語る。易老渡の少し手前で天幕を張つた。

十六日、易老渡で腰までの渡渉をした。氷のやうに冷たかつた。兩岸は水から直ぐにつき立つてゐる。そして山の腹は鬱蒼とした林である。瀧は直下數十丈。次第に激流とな

ゴーガン　(1848—1903)、フランスの畫家・詩人。

り、兩岸はとりつく術もない。晝食をすましたが、午後からのことを考へると胸はときめくばかりであつた。「この先は誰も入つたことが無い。どんなものか。」と言ひながら、順一は煙草の煙をふかしてゐた。草鞋の紐をしめ直して立上つた。やがて瀧へ出た。一つを越えれば又一つ。瀧の連續である。足の拇指一本と手の僅かの支へによつて辿つて行く所が度度ある。對岸は威壓的な岩壁である。その垂直な岩と奔走する水を眺めれば、自分の足場の不安は一層に深められる。かうして十二の瀧を越えた。その後も幾つもの瀧があつたが、つひに數へきれなくなつてしまつた。その内に薄暗いトンネルのやうな所へ出た。そこを通りぬけると巨石に行手を拒まれる。然し丸木をたてかけ、鉈で足場を削り、漸く巨岩の上に登つた。すると今度は霧が卷いて來たやうな氣がし

たが、それは飛瀑が瀧壺めがけて落下する爲に起る霧だとわかつた。こゝは左岸を通る。さうかうしてゐる内に日も落ちかけたので、林に覆はれた小さな砂地に天幕を張つた。夜半、猪の聲に目をさませば、時折石の落ちる音がする。

十七日「今日は尾根に出られよう。」といふ喜びが足を早めさせてくれる。上るに從つて峻嶮になり、三つの瀧を越えればそこにあらはれた物凄い岩の屏風。兩岸ともに二百米を超す大岩壁。案内者も之には驚いたらしく、荷をおいて偵察にいつたが「三十分」も歸つて來ない。此處から引返すのは殘念だと思つて、行くべき道を考へてゐた所に、「まだ〳〵大變だ。」といひながら、やがて案内者が歸つて來た。岩壁はうねつて四丁程續いてゐたが、瀧もなく、澤のまゝ通ることが出來た。仰ぎ見れば雪溪の終りが魔物の樣な口を開いてゐる。雪に

なれない案内者達は、こは〳〵上つて行く。雪渓には通過困難の所があるので、再び澤に下りなければならなくなつた。岩の割目に身體を挾んで二間餘りを辷り下りると、岩上に出る。先へ下り着いた順一の肩を足場に、漸く私も澤へ下りることが出來たが、足からは血がにじみ出てゐた。大きな石が轉んで、順一もあやふく足を折る處であつた。澤を上つて行けば、先の人の踏んだ小石がざら〳〵落ちて來てあぶない。緊張して上つて行く内に霧が忍びやかに寄せて來て、あたりに暗い蔭がさした。こゝで雨になつたらどうだらうと思ふとぞつとする。然し兎と聖の鞍部には淡陽がさしてゐる。過ぐる日、和田から下栗への道で胸をときめかして仰ぎみた鞍部も、もはや三丁の前に見える。二足這へば一足戻る程の急な所を一歩々々踏みしめて上つた。荷物を順一に賴み、盲

滅法に這ひはじめた。可憐な花が風に吹かれてゐるのも目にとまる。鞍部へ這上つたのは午後二時であつた。顧みれば今登つて來た谷の深さよ。石に腰をおろして四人は祝しあつた。熊吉・順一は、「實に名譽なことだ。西澤を通つたといつても人が信じまい。どうか何か標をしてくれ。」と賴んだ。そこで四人が一つづつ石を積み、一番下の石の下側に矢立の墨で年號と案内者二人の名を記し、私共の名をも附記した。

兎の岩尾根が青い空に岬の樣に突出てゐる。鞍部から聖の頂まで一時間で達した。その夜、滿ち足りた心の四人が聖平の假松をしとねに安らかな夢路をたどつた。夜半から風は烈しく吹きすさんで、翌朝から荒天となつた。私共は天候に惠まれて此の澤上りを行ふことが出來たことをどんなに喜びあつたか知れない。

（科學畫報）

一三 木精

森鷗外

巖が屏風のやうになつて立つてゐる。登山をする人が、始めて深山薄雪草の白い花を見つけて喜ぶのはこゝの谷間である。フランツはいつもこゝへ來てハルロオと呼ぶ。麻のやうなブロンドな頭を振立てて、高音でハルロオと呼ぶのである。

呼んでしまつて、じいつとして待つてゐる。

暫くすると、大きい鈍い最低音で、ハルロオと答へる。

これが木精である。

フランツはなんにも知らない。只暖かい野の朝、雲雀が飛立つて鳴くやうに、冷たい叢の夕、蟋蟀が忍びやかに鳴くやうに、こゝへ來てハルロオと呼ぶのである。併し木精の答へても

森鷗外　名は林太郎。文學者。文學博士・醫學博士。大正十一年歿、年六十一。

深山薄雪草　菊科。山地に生ず。高さ約〇・三米。

ハルロオ　呼び聲。おうい。
ブロンド　金髪。
高音　ソプラノ。
最低音　コントルバス。

くれるのが嬉しい　木精に答へて貰ふために呼ぶのではない。呼べば答へるのが當り前である。日の明かるく照つてゐる處に立つてゐれば、影が地に落ちる。地に影を落すために立つてゐるのではない。立つてゐれば影がさすのが當り前である。そして其の當り前の事が嬉しいのである。

フランツは父が麓の町から始めて小さい杏を買つて來て穿かせてくれた時から、こゝへ來てハルロオと呼ぶ。呼べばいつでも木精の答へないことはない。

フランツはだん〳〵大きくなつた。そして父の手傳をさせられるやうになつた。それで久しい間、例の巖の前へ來ずにゐた。

或日の朝である。山を一面に包んでゐた雪が巓にだけ殘つて、方々の樅の木立が綠の色を現して、深い〳〵谷川の底を

水がごう〳〵と鳴つて流れる頃の事である。フランツは久し振で例の巖の前に來た。

そして例のやうにハルロオと呼んだ。

麻のやうなブロンドな頭を振立てて呼んだ。併し聲は少し「さび」を帶びた次高音になつてゐるのである。

呼んでしまつて、じいつとして待つてゐる。

暫くして、もう木精が答へる頃だなと思ふのに、山はひつそりして、なんにも聞えない。只深い〳〵谷川がごう〳〵と鳴つてゐるばかりである。

フランツは久しく木精と問答をしなかつたので、自分が時間の感じを誤つてゐるのかと思つて、又暫くじいつとして待つてゐた。

木精はやはり答へない。

次高音　アルト。

フランツはじいつとして、いつまでも待つてゐる。

木精はいつまでも答へない。

これまでいつも答へた木精が、どうしても答へない筈はない。もしや木精は答へたのを、自分がどうかして聞かなかつたのではないかと思つた。

フランツは前より大きい聲をしてハルロオと呼んだ。

そして又じいつとして待つてゐる。

もう答へる筈だと思ふ時間が立つ。山はひつそりしてゐて、ごう〳〵といふ谷川の音がするばかりである。

又前に待つたほどの時間が立つ。

聞えるものは谷川の音ばかりである。

これまでは、フランツは唯不思議だ、不思議だ、と思つてゐたばかりであつたが、此の時になつて、急に何とも言へないほど

心細く寂しくなつた。譬へばこれまで自由に動かすことの出來た手足が、ふいと動かなくなつたやうな感じである。麻痺の感じである。麻痺は一部分の死である。死の息が始めてフランツの頭に觸れたのである。フランツは麻のやうなブロンドな髪が一本々々逆に立つやうな心持がして、何を見るともなしに身の周りを見廻した。目に觸れるほどのものに、何の變つた事もない。目の前には例の巖が屏風の樣に立つてゐる。日の光がところ〴〵霧の幕を穿つて樅の木立を現してゐる。風の少しも無い日の癖で、霧が忽ち細い雨になつて、今まで見えてゐた樅の木立が又隱れる。谷川の音の太い鈍い調子を破つて、どこかで清い鈴の音がする。牝牛の頸に懸けてある鈴であらう。

フランツは雨に濡れるのも知らずに、じいつと考へてゐる。

餘り不思議なので、夢ではないかと思つて見た。併しどうも夢ではなささうである。

暫くしてフランツは、何か思ひ附いたといふやうな風で、「木精は死んだのだ。」と呟いた。そしてぼんやり自分の住んでゐる村の方へ引返した。

同じ日の夕方であつた。フランツはどうも木精のことが氣に掛つてならないので、又例の巖の處へ出掛けた。

此の日、丁度午過ぎから極く輕い風が吹いて、高い處にも、低い處にも團がつてゐた雲が少しづつ動き出した。そして銀色に光る山の巔が一つ見えて來た。フランツが二度目に出掛けた頃には、巔といふ巔が、藍色に晴渡つた空にはつきりと描かれてゐた。そして斷崖になつて、山の骨のむき出されてゐるあたりは、紫を帶びた紅に匂ふのである。

フランツが例の巖の處に近づくと、忽ち木精の聲が賑やかに聞えた。小さい時から聞馴れた、大きい鈍い最低音の木精の聲である。

フランツは「おや、木精だ。」と、覺えず耳を敬てた。

そして何を考へる隙もなく駈出した。例の巖の處に子供の集つてゐるのが見える。子供は七人である。皆ブリューネットな髪をしてゐる。血色の好い丈夫さうな子供である。

フランツはつひに見たことのない子供の群を見て、氣兼をして立止つた。

子供達は皆じいつとして木精を聞いてゐたのであるが、木精の聲が止んで了ふと、又聲を揃へてハルロオと呼んだ。

勇ましい底力のある聲である。

暫くすると、木精が答へた。大きい〳〵聲である。山々に

ブリューネット帶黑色。

響き、谷々に響く。

空に聳えてゐる山々の巔は、此の時あざやかな紅に染まる、そしてあちこちにある樅の木立は、次第に濃くなる鼠色に浸されて行く。

知らぬ七人の子供達は皆じいつとして、木精の聲尻が微かになつて消えて了ふまで聞いてゐる。どの子の顏にも喜びの色が輝いてゐる。其の色は生の色である。

群を離れて矢張りじいつとして聞いてゐるフランツの顏にも喜びが閃いた。それは木精の死なないことを知つたからである。

フランツは何と思つてか、そのまゝ踵を旋して、自分の住んでゐる村の方へ歸つた。

歩きながらフランツはこんな事を考へた。あの子供達は

どこから來たのだらう。麓の方に新しい村が出來て、遠い國から海を渡つて來た人達がそこに住んでゐるといふことだ。あれは大方その村の子供達だらう。あれが呼ぶハルロオには木精が答へる。自分のハルロオに答へないので、木精が死んだかと思つたのは間違であつた。木精は死なない。併しもう自分は呼ぶことは廢さう。今度呼んで見たら答へるかも知れないが、もう廢さう。

闇が次第に低い處から高い處へ昇つて行つて、山々の巓は最後の光を見せて、とう〳〵闇に包まれてしまつた。村の家にちらほら燈火がつき始めた。

（鷗外全集）

一四 近古歌人鈔

夢さむる鐘のひびきにうちそへて十度の御名をとなへつるかな

とふ人も思ひたえたる山里のさびしさなくば住みうからまし

松風の音あはれなる山里にさびしさそふる日ぐらしのこゑ

水のおとはさびしき庵の友なれやみねの嵐のたえまたえまに

心なき身にもあはれは知られけり鴫たつ澤の秋の夕ぐれ

（西行）

さ蕨のもえいづる春になりぬれば野邊の霞もたなびきにけり

春過ぎて幾日もあらねどわが宿の池の藤なみうつろひにけり

寒蟬啼

吹く風の涼しくもあるかおのづから山の蟬鳴き

西行 俗名佐藤義清。出家して法名を圓位といひ、後西行と改む。「山家集」の著者。建久元年（一一九〇）歿、年七十三。

寒蟬 つくつくほうし。牛翅目、セミ科の一種。

て秋はきにけり

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ

荒磯に波のよるを見てよめる

大海の磯もとどろによる波のわれてくだけてさけて散るかも

慈悲の心を

ものいはぬ四方のけだものすらだにも哀れなるかなや親の子を思ふ

道のほとりに幼き童の母を尋ねていたく泣

沖の小島 今の初島。靜岡縣熱海市に屬し、その東南約十粁。

くを其のあたりの人に尋ねしかば父母なむ身まかりにしとこたへ侍りしを聞きてよめる

いとほしや見るに涙もとゞまらず親もなき子の母を尋ぬる

建暦元年七月洪水漫天土民愁歎せむ事を思ひて一人奉向本尊聊致祈念

時によりすぐれば民のなげきなり八大龍王雨やめたまへ

（源　實朝）

百首歌奉りし時

駒とめてなほ水かはむ山吹の花のつゆそふ井出の玉がは

定家朝臣の母みまかりて後秋頃墓所近き堂にとまりてよみ侍りける

稀に來る夜半もかなしき松風をたえずや苔の下に聞くらむ

（藤原俊成）

西行法師すゝめて百首歌よませ侍りける

おほぞらは梅のにほひにかすみつゝ曇りもはてぬ春の夜の月

建暦元年　順德天皇の御代（一八一）。

八大龍王　難陀・跋難陀・沙羯羅・和修吉・德叉迦・阿那婆達多・摩那斯・優鉢羅の龍王で風雨等の天象を司る。

源實朝　鎌倉第三代の將軍。歌人。承久元年（一二一九）正月、害せらる。年二十八。歌集を金槐集といふ。

井出の玉がは　京都府綴喜郡井出町。

藤原俊成　世に五條三位と稱す。後白河天皇の勅を奉じて千載和歌集を撰ぶ。元久元年（一二〇四）歿、年九十一。

旅人のそでふきかへす秋風にゆふ日さびしき山のかけはし

（藤原定家）

和歌所歌合に湖上の月明といふことを

夜もすがらうらこぐ舟はあともなし月ぞ殘れるしがのからさき

なにとなくきけば涙ぞこぼれぬる苔のたもとにかよふ松風

（宜秋門院丹後）

定家 俊成の第二子。新古今集・新勅撰集の撰者。仁治二年（一二四一）歿、年八十。

しがのからさき 滋賀縣滋賀郡下坂本村の地名。唐崎は古く辛崎とも書いた。近江八景の一で大津市より北約八粁。

宜秋門院丹後 後鳥羽天皇の中宮宜秋門院の女房。世にこと浦の丹後と稱せらる。源頼政の弟頼行の女。

一五 空行く雁

新玉の年立返りて、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。或夕暮、箱王は母の膝の上に戯れながら、

「如何に母御前、父はいづくにおはしますぞ。誠にや人のかたるは、『父御前は佛になりてまします。』と、その佛は何國にましますぞや。往きて拜み奉らばや、母御前いざさせ給へ。」

といひければ、遙かに忘れたる來し方も今更思ひ出されて、消え入るばかりに思はれて、母泣く〳〵宣ひけるは、

「あの曾我殿こそおのれらが父にてあれ。」

と心強く語らひけれども、涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。箱王かさねて申しけるは、

「父御前は、まことやらん『狩場より歸り給ふ道にて、工藤一萬

一萬 曾我十郎祐成の幼名。その實父河津祐泰は、伊豆國田方郡河津の莊を領せしが、伊豆赤澤山の遊獵に際し、工藤祐經のために射殺せらる。一萬時に年五歳。母、曾我祐信に再嫁せり。

箱王 一萬の弟。五郎時致の幼名。

曾我殿 太郎祐信。祐成兄弟の養父。

一萬 檢非違使廳の尉の第一座をいふ。

とやらんに射られて死に給ひぬ。』と、兄御前は語らせ給ふぞや。當時鎌倉殿のきりものにて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや、我等をも殺さんとも思ふらん。我等この里にありと知らでや過ぐらん。」

古本曾我物語

など、おとなしく語りければ、母より始めて、女房達まで皆袖をぞ絞りける。

かくて夏も過ぎ、秋も闌け、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟ふたり庭に出でて遊びゐたるに、五つ連れたる雁がねの南を指して飛びけるを見て、一萬申しけるは、

「あれ見給へ、箱王殿。空を飛ぶつばさも、皆別のつばさを交

工藤祐經その位にあり。
鎌倉殿　源頼朝。
この里　相模國足柄下郡下曾我村。

へざりけり。五つ連れたる鳥の中に、一つは父、一つは母、殘りの三つは子どもにてぞあるらん。一物言はぬ鳥類すら斯くの如し。我等は人倫に生まれながら、和殿は弟、我は兄、母はまことの母なれども、曾我殿はまことの父にてましまさぬこそ悲しけれ。我等が父をば河津殿と申してありきとかや。父だにも世におはしまさば、馬・鞍をも賜はり、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなん。我々より幼き者にても、馬・鞍・弓矢をもて物を射ありくことの羨ましさよ。これらのことども思ひつゞくれば、いつよりも今宵は父御前の戀しくおはしますぞや。」

とて、袖に顔をさし入れてさめ〴〵と泣きければ、弟もこざかしく顔をあはせて泣きゐたり。一萬の乳母の女房これを聞きて、

「あなあさまし、人もこそ聞け。いかに和上薦たち、夜も更けぬるに、などさやうにてはおはするぞ。とく〳〵入らせ給へ。」

と怖しげにいひければ、二人のものは門外に逃出でて、思ふやうに飽くまで泣きて後、内に入りにけり。

その後は、二人の者ども我が身の程を知りぬれば、世に亡き父を慕ひつゝ、語り合はするまではなけれども、たゞ目ばかりを見合はせて、互に袖をぞ濡らしける。未だ十歳にも満たざるに、あはれは深く思ひ知りけり。

或時、兄弟は竹の小弓に薄矧（すくきはぎ）の小矢を取添へて、遠侍に出でて遊びけるが、明障子のありけるに、二人立向ひ、あなたこなたへ射通して、一萬箱王に申しけるは、

「我等もいつか成長して、和殿は十三、我は十五にだにもなるならば、如何ならん野山にてもあれ、親の敵祐經をかくの如くさし合ひて射取りて、とにもかくにもなりなん。和殿も弓よく射習ひ給へ。我も射習はん。弓矢は男の一の能にあるなるぞ。」

と、いひければ、弟もうなづきて領承しけり。年ばへには怖しきことかなと人々思ひける間、或人一萬が乳母に此の由を語りけり。

（曾我物語）

遠侍　昔武家の邸にて、中門の傍に設けたる番をする侍の詰所。

曾我物語　十二卷。曾我兄弟の仇討せし事を主とせる物語。作者不詳。

一六　利根の秋曉

徳富蘆花

先年秋十一月の初旬、利根の左岸の息栖といふ所に泊つた。こゝは利根の本流が北利根北浦の末流と落合うて來るので川幅が濶く、對岸の小見川迄は小一里もあらう。宿は直ぐ水邊にあつて、夜半に眼を醒ますと櫓の音が軋々枕頭に聞える。

黎明に起きて、宿の者は未だ寢て居るので竊と戸を明けて、河邊に出ると、其處に薪が積んである。霜を拂つて腰かけた。まだほの暗い空も河面も茫として鉛色であつた。直ぐ裏の方の闇い小屋の中で、鷄が勇ましく曉を告げると、餘程經つて川向うの小見川の方から、さも微かな鷄の音が聞えた。大河を隔てて呼びかはす此の鷄聲は、實に宜い。チエルシアの賢

徳富蘆花　名は健次郎。文學者。熊本の人。昭和二年歿、年六十。

一「先年秋」より「軋軋枕頭に聞える」まで。

息栖　茨城縣鹿島郡の村。

小見川　千葉縣香取郡の町。

とコンコルドの哲とは實にかくの如く大西洋を隔てて呼びかはしたのであらう。

抑、また自分が眼には、曉は此の兩岸の鷄聲の間から川面に湧上つて來る樣に思はれた。暫くすると、小見川の方の空がぼうつと薔薇色になつて來た。と見ると川面も薄紅を流して、ほやりほやり水蒸氣が見えて來た。實に迅い。瞬きをする間もないのである。夜は川下の方へ流れて、曙の光は四邊に滿ちく〳〵て居る。鷄は猶鳴きつゞける。空と水の薔薇色が少し鍠ふ。忽ち晃々と眼ばゆき光が水に流れる。

秋の利根川

ふり返り見れば、朝日は晃々として今、息栖の宮の森の梢を離れたのである。その梢離るゝ烏一羽、朝日を負うて宛ら曉を告げ渡る神使の如く凛とした朝の大氣に羽搏つて、小見川の方へ飛んで行く。小見川はまだ碧々とした朝霧に眠つて居る。

對岸はまだ眠つて居るが、此方の村は最早さめた。背後の茅舍から煙が立上る。今、柵を出た家鴨は足跡を霜につけて、刮々呼びながら、朝日を碎いて水に飛込む。川楊の枝に小鳥が囀る。今、起きて來た村人が白い息を吹き〳〵川に下りて、河水を掬んで嗽ぎ、顏を洗ひ、それから遙かに筑波の方へ向ひて、掌を合はして拜んで居る。あゝ實に好い拜殿と自分は思つた。

（自然と人生）

一七　鐘の音

奥田正造

一日、奕堂和尚は殷々とひゞく曉鐘に心耳を澄まし、禪定から起つて侍僧を召し、鐘撞く者が誰であるかを見させた。侍僧はそれが新參の一小沙彌であることを返り報じた。そこで奕堂和尚は之を膝下に招いて、

「今曉の鐘は如何なる心持で撞いたか。」

と尋ねられた。小沙彌は、

「別にこれといふ心持もなく、只鐘を撞いたばかりでございます。」

と答へたので、

「いや、さうではあるまい。何か心に思うてゐたであらう。鐘撞かばかくこそ。誠に貴い響であつたぞ。」

奥田正造　教育家。成蹊高等女學校長。明治十七年生。

奕堂和尚　弘濟慈德禪師。諱は旗崖。曹洞宗管長。明治十二年寂、年七十五。

といはれた。そこで、

「別にこれといふ心得もございませんが、只、國許の師匠が鐘撞かば鐘を佛と心得て、それに添ふだけの愼しみを忘れてはならぬと、常々戒めて下されたことを思ひ浮かべて、鐘を佛と敬ひ、禮拜しつゝ撞いたばかりでございます。」

と答へた。奕堂和尙はしみ〴〵とその心掛を賞し、

「終生、萬事に處して、今朝の心を忘るなよ。」

と戒められた。この小沙彌こそは後年の森田悟由大禪師であつた。

朝毎に夕毎に慣れて撞く鐘の一韻にさへ、かほどまで敬虔の念を罩めた古人の心づかひは、いかにも貴い。

通天の鼎洲和尙が、或日、山門內で松の落葉を一つ〳〵手で

森田悟由 禪僧。性海慈船禪師。曹洞宗管長。大正四年寂、年八十二。

通天 京都市東山區なる東福寺をいふ。

鼎洲 禪僧。東福寺の住僧。嘉永二年(一八四九)寂、年七十六。

拾つて居られた。これを見た侍者某が、

「お手づから一つ〳〵お拾ひになるにも及びませぬ、どうせ只今掃きますゆゑ。」

と聲をかけた。鼎洲和尙はつく〴〵と侍者の顏を見て、

「今の言葉は修行する人の心持ではあるまい。どうせ、などと後をあてにするやうではいかぬ。一つ拾へば一つだけ綺麗になるのぢや。」

と戒められた。掃除、いひかへれば淸淨は、實にこの心でなければならぬ。箒を持つた時にのみ掃除があるのではない。一塵の心にとまつた時、その一塵を取除けて、淸淨となすところに眞の掃除がある。

雲門大師が門前で菜を洗つてゐた時、思はずその一葉を取

雲門大師 僧文偃のこと。支那五代の禪僧。雲門宗の祖。

流し、非常に驚いてこれを追ひかけ、千辛萬苦の末やうゝ拾ひ上げた。これを見てゐた某が、

「菜の一葉ぐらゐにそれほどまで苦勞なさるのは、何ういふわけでございますか。」

と尋ねた。大師は、

「一莖の大なるも、一葉の小なるも、均しくこれ天與であつて、人を養はんがためである。小なればとてこれを棄てて顧みないのは、天恩を忘れ、人道に背く所以ではないか。百粒の米は一粒より生じ、一滴の水はよく長江の大をなす。」

と敎へられた。この大精神に取扱はれる一粒一葉こそ、眞に道を修める人の生命を養ふに足りる尊い心身の糧といふべきである。

（茶味）

長江　支那の揚子江をいふ。

一八 法隆寺

高濱虛子

法隆寺の金堂にはひつた。明かるい處から急に暗い處にはひつたので、初の間は何も見えぬ。漸くにして印度佛のうしろが見えて來る。眞四角な天蓋が見えて來る。段々と樣樣な佛體が見えて來る。

案內者は壁の方を向いて、この壁畫は朝鮮の僧何某が聖德太子の命を受けて書いたものだといふ。唯眞黑な壁と思つてゐたが、成程壁畫がある筈だなと眸を据ゑて暗中を見ると、暫くして纔かにそれらしいものが目に入る。よく見て居ると、頭らしいもの、顏らしいもの、手らしいものなどが段々見えて來る。人間よりも稍大きい位に畫かれて居る佛樣が澤山あるのであつた。案內者は、この彩色の內の丹いのは珊瑚末

高濱虛子　俳人。名は清。明治七年生。

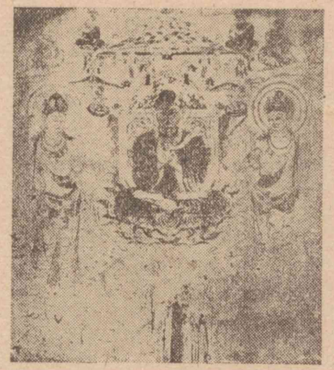
法隆寺　法相宗の本山。奈良七大寺の一。推古天皇十五年、聖德太子建立。

金堂　一寺の本尊を安置する堂。但し中古以後の新寺院には普通この稱を用ひず、本堂といふ。法隆寺金堂は推古天皇十五年の創建。

壁畫　筆者不詳。鞍作部鳥といひ又は高麗の僧曇徵ともいふ。

聖德太子　用明天皇の皇子。蘇我馬子と謀りて佛法を興隆し、冠位・憲法を制定し、三經の疏を著はす。推古天皇の二十九年（六〇一）薨、御年四十九。

だといふ。彩色があるのかと更に凝視すると、成程彩色がある。纔かに碧い色が見える。丹い色が見える。其處ばかりをじつと見て居ると、乏しい光線も自らこれのみに集つて來るのかと思ふやうに、段々其處が明かるくなつて來て、その丹碧の色は浮出るやうに目に入る。



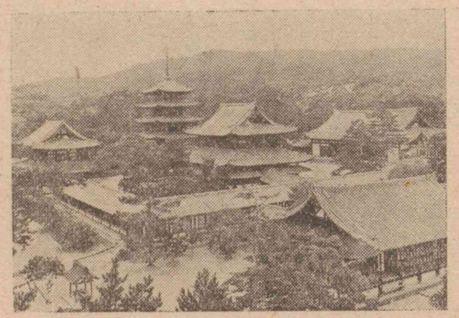
法隆寺壁畫（部分）

固より千年以上の歳月を經た畫だ。剝げて居る。燻つて居る。輪廓さへ明かで無い。それに拘らず、その丹碧の色は鮮かに目に入る。千年の古色を呈してなほその中に鮮明な光を湛へて居る。余は生をこの世に享けて以來、未だかゝる重みのある、そして鮮明な色を見たことが無い。その筈だ、珊

瑚を粉にした珊瑚末が壁同樣、惜しげも無く磨りこんであるのだもの。

余はそれから玉蟲の厨子も見た。印度佛も正面に廻つて見た。天蓋も凝視した。一として名高くないものはない。佛體も一々見た。何れにも恍惚として目をつぶつたが、併しこの丹碧の色ほど強く心を刺戟したものは無かつた。

それから金堂を出て夢殿の廊下を通つて居る時、りん〳〵と物が鳴つた。案内者が「あの鈴は金鈴といつて黃金を澤山に入れて拵へた鈴ださうです。」といつた。その音の好さと云つたら喩へようにも物が無い。この法隆寺



法隆寺

夢殿　八角造にて、高さ十二米弱。方十七米弱。天平の創立のまゝに存す。

にあるどの佛體を叩いても、あんな好い音は出まい。極樂淨土で啼くといふ伽陵頻迦の聲も、恐らくかうまでではあるまいと思つた。それから廊下を傳つて寶藏の方へ行きかけると、又りん〳〵と鳴つた。あゝたまらない好い音だ、と立止つて耳を澄ました。この時ふと、今、案内者は鈴だと云つたが、もしか、彼の金堂の壁畫の色が音を出したのではあるまいかと疑つた。

蘭の香も法隆寺には今めかし　（俳諧一口噺）

法隆寺の柱が著しく肉附を持つてゐることは、希臘建築と似通つてゐる。これを希臘美術東漸の一證と見なすことが出來る。もし支那に漢代から唐代へかけての樣々な建築が殘つてゐるならば、佛教渡來と共に、如何に西方の精神の影響を受けたかは明瞭に分ることであらう。現存に於ては、その證據となる建築は、たゞ日本に殘存するのみである。（和辻哲郎）

伽陵頻迦　梵語。妙聲鳥と譯す。

和辻哲郎　東京帝國大學教授。明治二十二年生。

一九　ミレー

相良德三

ミレーといふ名をきく時、人々は恐らくすぐに「落穗拾ひ」や、「アンジェラスの鐘」を思ひ浮かべるであらう。それについで又「樵婦」や「牧女」や「鋤を持つ人」などの素描をも思ひ出すであらう。そしてそれらの作品が、何れも農村生活を主題としたものである事に氣付く時、一體ミレーは單なる農村の生活ばかりを描いた畫家であらうかといふ疑問を起す人があるかも知れない。

一言にしていへば、ミレーは農夫の畫家であつた。彼は或時期に神話畫・肖像畫・裸體畫等を描かないではなかつたが、その他は常に農村の生活だけを描いた。農村の生活は實に彼の作品の全部を掩ふところの主題である。そして農村の生

相良德三　美術批評家。元成城高等學校教授。明治二十八年生。

ミレー（1814—1875）フランスの畫家。

活を描いた所に繪畫史上に於ける彼獨特の地位もあり、また彼の人間としての偉さも存在すると云つても間違ではないであらう。

ミレー筆　落穂拾ひ

云ふ迄もなく、農村の生活をかいた畫家は、決してミレーに限つたわけでもなく、又ミレーに始つたことでもない。既に十七世紀のオランダの畫家の中にも、農夫をかいた人人があつた。けれども彼等のかいた農夫は次の二種類の何れかであつた。即ち一は、都會人らしい、知識的な容貌・態度を持つた農夫で、若し彼等が百姓服を着て居らず、農具を持つてゐないならば、恐らく教養ある都會人と間違へられるやうな農夫であり、もう一つは勞働してゐる農夫ではなくて、酒に醉つた農夫、大食してゐる農夫、おどけてゐる農夫、人々に笑はれるために描かれてゐるやうな農夫である。これ等は何れも本當の農夫とは云はれない。前者は恐らく現實には存在しない農夫であり、從つて少しも理解されてゐない農夫である。後者は疑ひもなく事實存在してゐる農夫ではあるが、決して本質的な農夫ではない。

更に十八世紀になつても、農夫を描いた畫家はあるが、彼等の描いた農村は餘りに美しく、餘りに天國の樣である。其處は人生の慘苦から遠く離れた、平和と幸福とに充ちたユートピアとして描かれてゐる。從つて其處に住む農夫も純情にして高潔、些の汚れも悶えも知らない人々として描かれなければならなかつた。

ユートピア　理想鄉。

子供達に食べさす女
（ミレー筆）

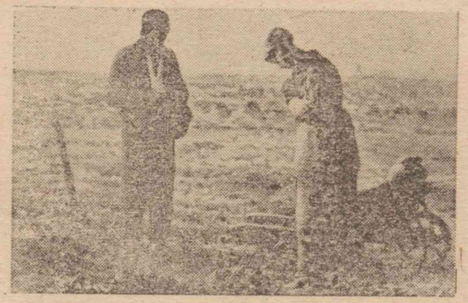
このやうな農村、このやうな農夫が單に空想に過ぎないことは此處に改めて云ふ迄もあるまい。農村の生活は、古くはギリシャの詩人ヘシオドスが既に「勞作（エルガ）」の中に歌つたやうに、又近くは農村問題の事實がそれを表明してゐるやうに、實に勞苦に充ちたものである。農夫は額に汗してパンを得なければならない。朝から晩まで働き通さなければならない。さうしなければ、彼等は生きて行かれないのである。それが彼等の運命なのである。實に働くことは農夫の生活そのものであり、農村の生活の本質であると云つても差支ないであらう。

「働く農夫」、これこそミレーが發見した主題である。この點に於て、吾々はミレーを眞の農夫の發見者と呼んでも好いと思ふ。彼の描いた農夫達がどんなに精一杯に働いてゐるか。

ヘシオドス 西紀前八世紀のギリシャの詩人。

例へば鳥の群に跡をつけられながら種子を蒔いてゐる「種子を蒔く人」、鋤にもたれてほつと息をついてゐる「鋤を持つ人」、自分の體の何倍もある大きな薪を背負つて、その重みのために體を二つに折り曲げてゐる「樵婦」、その他「土を掘る人」、「乾草を集める人」、「海藻拾ひ」等を透してミレーを考へたい。

然し吾々はミレーを單に農夫の發見者としてだけ考へるものではない。それだけでも繪畫史上に於ける彼の位置は際立つたものであらうが、吾々は彼の藝術にもつと深い意味を見出すものである。彼は單に農夫、眞の農夫の生活を描いたばかりでなく、農夫の中に「人間」を見出してゐる。人間に普遍的な、



ミレー筆　アンジェラスの鐘

そして絶對的な價値を描いてゐる。吾々が專門的な繪畫史的興味を離れても、ミレーを尊敬することが出來るのはそれがためである。

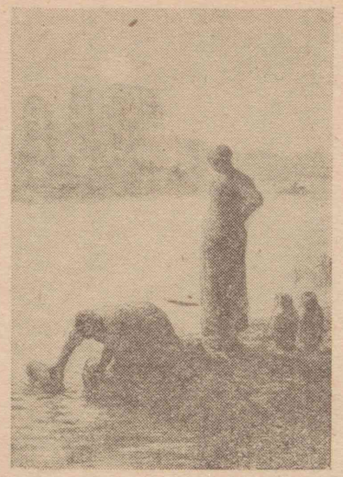
ミレーに描かれた農夫達が、何れも運命に堪へながら働いてゐる事は、既に述べた通りである。この事は直ちに、彼等が單に農夫としてでなく、「人間」として描かれてゐることの有力な暗示である。私は多くのミレー讃美者のやうに、彼等は百姓服を着けた受難者である。」と叫ばうとは思はないが、然し少なくとも彼等の中に、人間にとつて本質的なものを感じることは確だと思ふ。私は額に汗して働くのは人類の運命であるが故に、ミレーの農夫が、よく運命に堪へたのであるか如何かは知らないが、然し單に農夫であり、平凡人であるに過ぎない彼等が、苦痛の中に生きんが爲の仕事の中に、或喜びを感

じてゐることは看取される。その喜びが多分彼等の苦痛を和げたであらう。ミレー自身も云つてゐる。「この地方では到る處の畑地に於て、此等の人々が土を耕し、掘つてゐるのを見るであらう。そして彼等は時々腰をのばして、手の甲で額の汗を拭くのである。『汝の額に汗して汝のパンを食ふべし。』これが果して幸福と歡喜の勞働であらうか、と世人は疑ふであらう。然し私はその中にこそ眞の人間性と、偉大な詩が潛んでゐるのを見るのである。」と。ロマン・ローランが云つてゐるやうに、ミレーに取つては、人間の苦痛は必然的なものである。從つてそれは眞實である。眞實である故に、それは喜び——嚴肅な喜び——であつた。この嚴肅な喜びの爲に、ミレーの農夫達は苦しい運命に對しても、よく堪へることが出來たのである。

ロマン・ローラン（1866—）現代フランスの思想家・小說家・劇作家。

この考を更に確めるやうに見えるのは、前にも擧げたところの農夫の生活の幸福な側面に關した幾つかの作品である。私はそれを「幸福な」と云ふ。然しその幸福とは、云ふ迄もなく普通の意味に於ける農村生活の幸福ではない。勞働を愉快なもの、一種の舞踏に類するものとして考へる人々のいふやうな幸福ではない。ミレーの幸福は人生の苦痛を通して、少なくとも苦痛に關聯して感じられるやうな、そんな種類のしみじみとした幸福である。ミレーは云つてゐる。『子供達に食べさせる女』を見る人には、次のやうな事を考へてほしい。子供達に食べさせる物を得る爲には、彼等の父は働いたのである。」と。それ故にこそ、ミレーは小さな子供を胸に抱いてゐる「子供をあやす若い母親」をかき、「病兒」を氣遣つて、心配さうに戸口に立つてゐる若い父親をかいたのである。更に彼は

「水を汲む女」についても、私は單なる水を汲む女、若しくは女中を描かうとしたのではない。子供達に食べさせるスープを拵へるために、水を汲んで來る母性を描いたのである。」と云つてゐる。



ミレー畫　水を汲む女

彼が幸福なる生活を描いたのは、唯それが愉快で、愛すべきものである爲ではなく、それが人間の本質の要求だからである。彼の作品から嚴肅な、幽鬱な何物かが感じられるのは全くそれが爲である。

（アルス美術叢書）

二〇 家居

吉田兼好

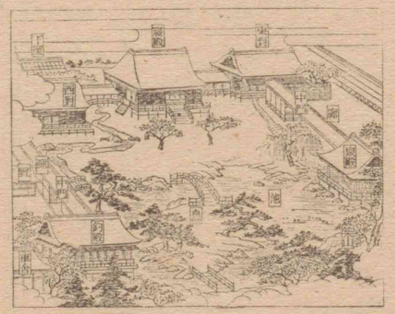
家居のつきづきしくあらまほしきこそ、かりのやどりとは思へど、興あるものなれ。

よき人ののどやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色もひときはしみじみと見ゆるぞかし。今めかしくきらゝかならねど、木だちものふりて、わざとならぬ庭の草も、こゝろあるさまに、簀子・透垣のたよりをかしく、うちある調度も、昔覺えてやすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ。

多くのたくみの、心をつくしてみがき立て、からの、やまとの、めづらしくえならぬ調度どもならべ置き、前栽の草木まで、心のまゝならずつくりなせるは、見る目も苦しく、いとわびし。

さてもやはながらへ住むべき。また時のまの煙ともなりなむとぞ、うち見るより思はるゝ。大かたは家居にこそ、ことざまは推しはかられる。

後德大寺のおとゞの、寢殿に鳶ゐさせじとて、繩を張られたりけるを、西行が見て「鳶の居たらむは、何かは苦しかるべき。この殿の御心さばかりにこそ。」とて、その後は、參らざりけると聞き侍るに、綾の小路の宮のおはします小坂殿の棟に、いつぞや繩を引かれたりしかば、かのためし思ひ出でられ侍りしに、まことや「烏のむれゐて、池の蛙をとりければ、御覽じ悲しませ給ひてなむ。」と、人の語りしこそ、さてはいみじくこそとおぼえしか。德大寺にもいかなる故か侍りけむ。



寢殿

吉田兼好 歌人。文章家。京都吉田山の神職卜部兼顯の子。初め後宇多天皇に仕へて左兵衛尉たりしが天皇の崩後は出家せり。正平五年（一三〇〇）寢、年六十八。（或云六十七。）

後德大寺のおとゞ 左大臣藤原實定。左大臣公能の子。歌人。晩年剃髮して如圓といふ。建久二年（一一九一）薨、年五十三。

寢殿 中古貴族の家の居間。

西行 西行法師。俗名佐藤義清。歌僧。建久元年寂、七十三。

綾の小路の宮 性惠法親王。龜山天皇の十三皇子。

小坂殿 所在不詳。

かみな月の頃、栗栖野といふ所を過ぎて、或山里に尋ね入ること侍りしに、遙かなる苔の細道を踏みわけて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉に埋もるゝ筧のしづくならでは、つゆおとなふものなし。閼伽棚に菊・紅葉など折りちらしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよとあはれに見るほどに、かなたの庭に、大きなる柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、まばらをきびしく圍ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばとおぼえしか。

家の造りやうは、夏をむねとすべし。冬はいかなる所にも住まる。暑き頃、わろき住居はたへがたきことなり。深き水は涼しげなし。淺くて流れたる、はるかに涼し。こ

かみな月　陰曆十月の異稱。
栗栖野　中古朝家の牧場ないひ同名の地所々にあり。ここは京都市東山區山科の栗栖野ならん。
閼伽棚　閼伽は梵語の「水」のこと。佛に供へる水や花をのせる棚。

まかなるものを見るに、やり戸は蔀の間よりも明かし。天井の高きは、冬寒く、灯くらし。「造作は用なき所を造りたる、見るもおもしろく、よろづの用にもたちてよし」。とぞ、人のさだめあひ侍りし。

屏風・障子などの繪も、文字も、頑なる筆樣して書きたるが見にくきよりも、宿のあるじの拙く覺ゆるなり。大方、もてる調度にても、心おとりせらるゝ事はありぬべし。さのみ良き物を持つべしとにもあらず。損ぜざらむ爲とて、品なく見惡きさまにしなし、珍しからむとて、用なき事どもし添へ、煩はしく好みなせるをいふなり。古めかしきやうにて、いたく事々しからず、費もなくて、物柄の良きがよきなり。

「うす物の表紙は、とく損ずるがわびしき。」と人のいひしに、頓阿が、「うす物は、かみしもはづれ、螺鈿の軸は、貝おちて後こそいみじけれ。」と申し侍りしこそ、心まさりて覺えしか。一部とある草子などの、おなじやうにもあらぬを見にくしといへど、弘融僧都が、「物を、かならず一具にとゝのへむとするは、拙き者のすることなり。不具なるこそよけれ。」といひしも、いみじく覺えしなり。すべて何もみな、事のとゝのほりたるは、あしき事なり。し殘したるを、さてうち置きたるは、おもしろく、息のぶる業なり。「内裏造らるゝにも、必ず造りはてぬ所をのこすことなり。」と、ある人申し侍りしなり。先賢の作れる内外の文にも、章段の缺けたることのみぞ侍る。

家にありたき木は松・櫻。松は、五葉もよし。花は一重なる

頓阿 俗名二階堂貞宗。桑門和歌四天王の一。四天王は頓阿・慶運・淳勝・兼好を稱す。建德三年(一三八三)寂、年八十四。

弘融 權少僧都。歌人。

よし。八重櫻は、奈良の都にのみありけるを、この頃ぞ、世に多くなり侍るなる。吉野の花、左近の櫻、みな、一重にてこそあれ。八重櫻は、ことやうのものなり。いとこちたく、ねぢけたり。植ゑずともありなむ。遲櫻、またすさまじ。蟲のつきたるもむづかし。梅は白き、薄紅梅。一重なるが、とく咲きたるも、重なりたる紅梅の匂めでたきも、皆をかし。遲き梅は、櫻に咲きあひて、おぼえ劣り、けおされて、枝に凋みつきたる、心うし。「一重なるが、まづ咲きて散りたるは、心とくをかし。」とて、京極入道中納言は、なほひとへ梅をなむ、軒ちかく植ゑられたりける。京極の屋

繪本徒然草

京極入道中納言 藤原定家。法名覺靜。新古今・新勅撰二集の撰者。その第は、京都の東端なる京極にありき。

の南向に、今も二本侍るめり。柳、またをかし。卯月ばかりの若楓、すべて、よろづの花紅葉にも勝りて、めでたきものなり。橘・桂、いづれも、木は物蒼り、大きなるよし。草は山吹・藤・杜若・瞿麥、池にははちす。秋の草は荻・薄・きちかう・萩・女郎花・藤袴・しをに・われもかう・刈萱・龍膽・菊、黄菊も、蔦・葛・朝顔、いづれも、いと高からず、さゝやかなる垣に、繁からぬよし。この外の、世に稀なる物、唐めきたる名の聞きにくゝ、花も見馴れぬなど、いとなつかしからず。大かたなにも、珍しくありがたき物は、よからぬ人のもて興ずるものなり。さやうの物なくてありなむ。

相模の守時頼の母は、松下の禪尼とぞ申しける。守を入れ申さるゝことありけるに、ずゝけたる明障子の破ればかりを、禪尼手づから、小刀して切りまはしつゝ張られければ、兄の城

しをに

われもかう

相模の守時頼 鎌倉五代の執權北條時頼。世に最明寺殿といふ。弘長三年（一九三）歿、年三十七。

松下の禪尼 修理亮北條時氏の室。秋田の城の介泰盛の女。

の介義景、その日の經營して候ひけるが、「賜はりて某男に張らせ候はむ。さやうの事に心得たるものに候ふ。」と申されければ、「その男、尼が細工によもまさり侍らじ。」とて、なほ一間づつ張られけるを、義景「みなを張りかへ候はむは、はるかにたやすく候ふべし。まだらに候ふも、見ぐるしくや。」と、重ねて申されければ、「尼も後は、さわ〳〵と張りかへむと思へども、今日ばかりはわざとかくてあるべきなり。ものは破れたる所ばかりを修理して用ひることぞと、若き人に見ならはせて、心づけむ爲なり。」と、申されける、いとありがたかりけり。世を治むる道、儉約をもととす。女性なれども、聖人の心に通へり。天下をたもつほどの人を、子にてもたれける、まことにたゞ人にはあらざりけるとぞ。

城の介義景 安達義景。禪尼の兄。

亀山殿建てられむとて、地をひかれけるに、大きなるくちなは、數も知らず凝り集りたる塚ありけり。この所の神なりといひて、事の由を申しければ、いかゞあるべきと、勅問ありけるに、「ふるくより、この地を占めたる物ならば、さうなくほり捨てられ難し。」と、皆人申されけるに、このおとゞ一人、國土に居らむ蟲、皇居を建てられむに、何の祟をかなすべき。鬼神は邪なし、咎むべからず。只みなほり捨つべし。」と申されたりければ、塚を崩して、くちなはをば大堰川に流してけり。更に祟なかりけり。

御前の火爐に火をおくときは、火箸してはさむことなし。土器よりたゞちにうつすべし。さればころびおちぬやうに心えて、炭を積むべきなり。八幡の御幸に、供奉の人淨衣をきて、手にて炭をさゝれければ、ある有職の人「白きものを著たる日は、火箸を用ひる苦しからず。」と申されけり。

主ある家には、すゞろなる人、心のまゝに入りくることなし。あるじなき所には、道ゆき人、みだりに立入り、狐・梟やうの物も、人氣にせかれねば、所得顔に入り栖み、木魂などいふけしからぬ形も現るゝものなり。また鏡には、色形なき故に、よろづの影來りてうつる。鏡に色形あらましかば、うつらざらまし。虛空よく物を容る。われ等の心に、念々の、ほしきまゝに來り浮かぶも、心といふもの無きにやあらむ。心に主あらましかば、胸の中に、そこばくの事は入り來らざらまし。（徒然草）

このおとゞ　藤原實基。

徒然草　吉田兼好の隨筆。

二一 ロダン

木村莊八

一八四〇年十一月十四日、巴里に生まれたフランソア・アウギスト・ロダンは、警察の書記官の子で、幼少の頃、物質上の必要からブーヴェーの寄宿學校にやられてゐた。若しも近眼でなかつたならば、小さい篤學者にもなつてゐた事であらうが、彼は黑板に書かれた字もよく見えない程であつた。で、自然に學科――特に算術――等が嫌ひになつて、其の時分から瞑想したり、夢想したりする事を好み、小演說家を以て自任してゐた。

其の學校を去つて、巴里へ歸つて來たのは十四の歲である。彼はやがて裝飾技藝學校の素描科に入り、それに附屬してゐる肉づけ科にも出席して、直ちに伎倆を發揮した。

木村莊八 草土社・春陽會同人。美術家。明治二十六年生。

ロダン (1840—1917)。佛蘭西の彫刻家。

一八六四年或人に勸められて、初めてサロンに出品すべく、彼は男の頭像を造つて、審査員の下に送つた。審査員はそれをはねてしまつたが、其の作品は後年「鼻かけの人」として、藝術史上に重要の位置を占めたものである。

ロダン肖像

ロダンは、あらゆる舊習と官學的潮流と、同時代に見る職人的藝術家とを輕蔑した。自然は常に美しい。自然は凡て美しい。ロダンの師は唯自然ばかりである。

ロダンの生活は極めて平靜で、常に透徹した一本道をぐいぐい押通してゐる。包含する處は飽く迄も包含し、自分の個性に合はない處は振向かずに放棄して行く。自分の內に要求する處に從つて、境遇をも周圍をも生かして行くので、他の

サロン 現代美術家の製作品を陳列するパリの有名なる展覽會場。

力に依つて動かされる處は殆ど無い。二六時中自分の内から外へと、常に及ぼして行くので、先づ外から内へ受けて、それを更に生かして行く側の人では無い。ヴァン・ゴオホとロダンとの相違は此處にある。ゴオホは自分のぶつかる物に一一全軀全心の力を擧げてぶつかり、其處に一々記念碑を立てゝゐる。それ故自分から進んで常に何等かの對壁にぶつかり通しの、錯雜した生活をつゞけて行つた。ロダンは先づ自分を、自分の欲する對壁にぶつけてかゝる。其の際、或事件が自分に振りかゝつて來ても、全力は自分の意志のある處に集中してゐて、追加的の事件は消滅するがまゝに消滅させて了ふ。ロダンの生活讃美には明かるい華やかな調子があるが、ゴオホの生きる喜びには悲壯な白兵戰の氣合がある。

ロダンには愛がある。其の作品の何れにも慕はしい愛の

ヴァン・ゴオホ　佛蘭西の畫家。

氣息が波打つてゐる。血つゞきといふ氣持、母體といふ氣持、……ロダンは靜かに、正確に、自分の持つてゐる愛を掘下げ、極めて人間的な、赤裸な光を生きものといふ領土に投じてゐる。

氏はかうして藝術と生活と宗教とを少しも破調なく、融合させて行つてゐる。

一九〇三年、氏は國際彫刻家・畫家・版畫家協會の會頭に選ばれた。翌年ニウ・ギャレリーでは、「考へる人」の大銅像を初め、「夢」「聖ヨハネ」等が展覽された。

雜誌「生の藝術」は、「考へる人」を買取り、巴里の所有として飾る事を國民に提議した。立ち所に一萬五千フランの金額が集

ロダン作　考へる人

ニウ・ギャレリー　新しい展覽會場。

つた。そこで、其の大銅像は當局者の手に移り、ロダンの希望通り、佛國の靈廟であるパンテオンの階段に幾萬の群集の喝采を受けながら据ゑられた。一九〇九年には、ロダンの作品のみを充たす畫堂がニューヨークに出來上つた。メトロポリタン-ミュゼアムがそれである。又巴里では、彼の賞讃者達が氏の七十回誕生祝賀會を開き、パンテオンの「考へる人」の足下に花輪を捧げて、永遠に氏の健康を祝した。此の粘土と大理石との世界統一者の黃金時代にあつて、彼が

「佛國より日本國へ交誼を致す。

最緻なる、或は最大なる實在、例へば大洋・雲嶽・草木・昆蟲の精靈を窺視し得たる日本の藝術は、又吾が踏む道なり。」

此の書信に添へて小さき崇高な三個のブロンズを送り越した事も、消し難い喜びの記憶となつてゐる。（ロダンの藝術）

パンテオン 佛蘭西の殊勳者を祀れる處。

ブロンズ 青銅像。

三 日本趣味

田部重治

日本人の衣食住は、その樣式に於て自然性をもち、素朴的と思はれるほどの單純さをもつてゐることが特に注意される。先づ第一に衣服を見ても、履物を見ても、さうであつて、それ等は何れも極めて簡單なる考案から出發し、この考案の原型を失ふことなく發展して來てゐることが見られる。又、食物を見ても、その發達せる方面には、加工した複雜なものがあるにしても、通常は野菜や魚を主とし、多くは形のまゝに燒くとか煮るとかして用ひてゐるのを見ても、慥かにさうした感じがする。家屋はどうかと云ふに、これも複雜な構造をもつものもあるが、概して木材や茅を材料とし、それに意義を見出して來たのは、なんとしても素朴的且つ自然的な感じを與へる。

田部重治 法政大學教授。明治十七年生。

そして日本人の生活のどの方面を見ても、反自然的、人工的と云ふ感じのするものは餘り見出されない。食物を見ても、なるべく人間に近いものを避け、野菜を主として來たことなどを見ても、弱肉强食の意味が、大なる自然界のなかに起るさざ波ほどの變動に過ぎないやうな氣がする。衣服を見ても、履物を見てもさうであり、建築を見ても、大自然との調和が、大きな要素をなしてゐるやうに見える。神社佛閣なども、自然の中から生え出たやうな感があり、庭園などを見ても自然を立體的に現出するやうに努力されてゐることが分かる。如何なる農夫の家でも如何なる山奥の賤が家でも、そこに一坪の土地の餘裕があれば、さゝやかな自然を出現せしめ、金魚を泳がせて樂しんでゐる。彼等の思想や感情には、自然の征服とか鬪ひとか云ふものは見出されなかつた。

かうした素朴的且つ自然的樣式は、日本民族の文明が未熟であつた時代のもので、謂はば途中のものであることを示してゐると云ふ人があるかも知れない。しかしさう速斷することは許されない。その故はかうしたものが、現代の進化せる日本人に取つても存在の意義があるのみならず、歷史的に見た日本人の思想感情に於ても、それと引離すことの出來ないものが見出されるからである。從つてかうしたものは、日本民族に取つて固有な歷史をもつて來たものであり、日本人の生活の隅々にも行き渉り、われわれの思想や感情の目につかぬところまで深く根ざしてゐると見ることが出來る。

されば、今後、日本文化が如何に發展を遂げても、今迄の進み方をすてて、外國の樣式にすつかり這入りこんで仕舞ふとは考へられない。如何にも日本人は過去の樣式を捨てて仕舞

ひさうにも見える。しかしそれは外見であつて、一方には日本人は日本在來の形式を固守しつゝ、それを深めて來、又、深めつゝある事實を否定するわけには行かない。それは恐らく衣、食、住の三方面に就いて、さう云ふことが斷言出來ると思ふ。例へば日本の衣服は前に述べたやうに素朴的な考案から出發してゐる。しかしそれは素朴的な形式を固持しつゝ深められた意匠、色彩、その他美術的な點に於て、到底、歐洲のものの及ばない點をもつてゐる。履物を見てもさうである。それは簡素な思考から出發してゐる。しかしこれも原型を保存しつゝ、その形式を一層優美にし、そこに藝術的要求を充たしてゐる點に於て、珍しいものである。

食物その物に就いても、同樣のことが云ひうると思ふ。なるほど日本人の食物は自然のまゝで、素朴的で、加工したものが餘りないやうに見える。しかしこの自然のまゝに見える食物も、到底、他の民族の窺ひ知ることの出來ないほどの深い味をもつものにまで高められてゐることを考へなければならない。換言すると、西洋料理にしても支那料理にしても、料理法が如何にも複雜さうに見えても、其の味はその現れた表面に止まつてゐる感がある。つまり大した奥行はない。そこへ行くと日本の食物は、例へば漬物の味にしても、野菜料理にしても、形式は簡單さうに見えて、その內容や本質の複雜さは一通りではない。魚の如き、その料理はむき出しのやうでも、燒き方、煮方の複雜さは一通りではなく、刺身の如きものにしても、形式が頗る簡單なやうに見えて、その內容的な研究や、簡單に見える形式の研究など、一通りならず深いものである。又、日本の各地に發達した地方的風味のある料理でも、形式的

な方面に於て簡單に見えて、內容的な深さに於て、具行のあることを示してゐるものが多い。

家屋はどうであるか。木材や茅を用ひる建築は、歐洲ものに比して素朴的であると云へるかも知れない。しかしこの素朴的な形式は矢張り驚くべきほどの內容をもつものに高められつゝあることを考へなければならない。卽ち木材や茅を用ひる建築が、一般には追々に用ひられなくなつたものの、一方には最も優雅な美術的なものとして、新しい眼をもつて一層洗煉され美化されて、用ひられつゝあることを見遁すことが出來ない。

是等の衣食住の樣式は、たとへ外國の樣式が今後、優勢になつても、決して捨てられることなく、却つて一層、內容的に深められ、向上されつゝあるのが、その現狀である。われ〳〵は西

洋料理や支那料理をも味はふ。しかし日本料理の趣味を一層よく解し、それを向上せしめつゝある。その他衣服に就いても家屋に就いても同樣のことを云ふことが出來る。恐らく日本的なものは、日本の風土から、日本人の體質から、その他色々のものからどうしてもさうなくてはならぬやうに發展し來つたもので、それこそ日本人に取つて獨特のものであり、自然的なものと見ることが出來る。

われ〳〵は以上のことからして日本の文化、例へば文學や繪畫やその他のものを解釋することが出來ないのであらうか。

日本の和歌や俳句は、丁度、衣食住の形式が單純に見えると同じやうに、素朴的且つ單純であるかも知れない。しかし是等のものは長らく洗煉され來り、その持つてゐる內容は決し

て簡單なものではない。又繪畫にしてもさうである。日本の繪畫は形式が素朴的であると云ふ人があり、それも一面の眞理をもつてゐると見られるかも知れない。しかしそれは優れた象徵的價値をもつてゐるほどに內容的である。恐らく音樂その他にしても同じことが云へるのではないかと思ふ。

從つて如何に外國の詩の影響が大きくても、又、如何に過去の形式を破壞せる新しい和歌や俳句を創める人があつても、それは今迄の形式以外のものを創造すると云ふことになるかも知れないが、過去の形式をなくすることが出來ないで、依然として過去の形式が、大勢を支配してゐる有樣は、丁度、日本の衣食住に於ける趣味と同じであると思ふ。又、繪畫に於て如何に油繪や水彩畫が勢力をうるに至つても、又、油繪や水彩

畫の影響が、日本畫の上に現れるにしても、日本畫固有の特質は依然として殘るに間違ひないどころか、外部から受けた影響を內面的に取入れて、一層、洗煉されて來たし、又、洗煉されて行くことと思ふ。要するに日本は各方面に於て外來の趣味を取入れることにより、新しい樣式をこしらへもするが、より多く今迄の樣式を深め、それを深化させて行くことと思ふ。

以上の意味に於て、日本趣味は素朴的な形式をとりながら、內容が深まつてゐる點に於て象徵的なものになつてゐる點が多いと思ふ。此の象徵の意味は、ヘーゲルがエヂプトの建築の如きものを擧げて云つてゐるのとは反對に、最も內容あるものを素朴的な形式によつて現さうとする近代的な象徵主義である。その意味に於て、日本の在來の形式によつてもられた藝術は象徵的なものが多い。さびとか枯淡とか云ふ

ヘーゲル　(1770—1831) ドイツの大哲學者。

エヂプト　ナイル河に沿ひ、世界史上人類の最初に國家的生活を營みし地。トルコ帝國の一部なりしも西紀一九一四年革命後獨立して王國となる。

ことも、皆そこに存在の基礎を置いてゐる。

しかしわれ〳〵がこれで永久に滿足すべきであると云ふのではない。たゞわれ〳〵はかくの如きものを失つてはならないし、又、かくの如きものを日本人固有の生活から根本的に理解しなければならないと思ふ。

（歴てしなき道程）

――〔終〕――

品詞分類語表

一　本表は特に注意すべき語彙を五十音順に配列した。

二　辭書に就いて調べる時には左の諸點に留意せよ。

1 字劃　2 音・訓　3 原意義　4 轉意義　5 熟語　6 同音語　7 同意語　8 對照語

…名詞…

（ア行）

塵殺　アウサツ　九三・一三
閼伽棚　アカダナ　一五三・四
新玉の年　アラタマのトシ　一三五・一
荒磯　アリソ　三一・九
暗示　アンジ　一四四・七
按排　アンバイ　三一・五
鞍部　アンブ　一〇三・八
有職　イウソク　一五九・一
生身　イキミ　六三・一
一瞬　イッシュン　一四一・二
追　イトマ　一八・六
家居　イヘヰ　一五〇・一
隱遁者　イントンシャ　七七・三
團扇　ウチハ　七三・一〇
鬱蒼　ウッサウ　三五・一
うひ學び　うひマナび　四二・七
盂蘭盆　ウラボン　八六・五
臆面　オクメン　一七・四
おしめり　一〇〇・三
大路　オホヂ　二八・三

（カ行）

筧　カケヒ　一五二・三
河岸　カシ　三七・九
磧　カハラ　一五・二
柄　ガラ　八九・三
狩場　カリバ　一三五・二
伽陵頻迦　ガリョウビンガ　一四〇・二
閑寂　カンジャク　七四・四
看取　カンシュ　一四七・一
漢籍　カンセキ　八九・二
菊の酒　キクのサケ　七五・六
氣合　キアヒ　一九・四
木樵　キコリ　七三・四
驚惶　キャウクワウ　九九・一
興　キョウ　一五〇・二
きりもの　一二六・二
繰言　クリゴト　六七・一三
光琳波　クワウリンナミ　二一・七
花卉　クワキ　八九・八
換言　クワンゲン　一六九・一四
關聯　クワンレ　一四八・七
敬虔　ケイケン　二四・一〇
輕蔑　ケイベツ　一六一・七
經營　ケイメイ　一五七・一
教養　ケフヤウ　一四一・一三
幻想　ゲンサウ　七六・八
嚴肅　ゲンシュク　一四七・一二
玄冬素雪　ゲントウソセツ　八二・一
虛空　コクウ　一五九・八
苔のたもと　一二四・六
來し方　コしカタ　一三五・六
木精　コダマ　一一〇・八
枯淡　コタン　一七三・一三
ことざま　一五一・一
ことやう　一五五・三
聲尻　コワジリ　一一七・五
金剛力　コンガウリキ　一一〇・四
金堂　コンダウ　一三七・一

（サ行）

鎖國　サコク　六・一〇
さび　二三・五
慘苦　ザンク　一四三・一〇
珊瑚末　サンゴマツ　一三七・一一
讃美者　サンビシャ　一四六・七

周知 シウチ　八六・六
四角 シカク　一一・一
刺戟 シゲキ　三九・八
茂み シゲみ　一七・一
自在性 ジザイセイ　六・一
思潮 シテウ　六・六
しとね　一〇九・一〇
蔀 シトミ　一三二・一
しほ　七九・六
清淨 シャウジャウ　九一・九
終生 シュウセイ　一三四・七
執行 シュギャウ　一五五・三
儒者 ジュシャ　二五・三
主題 シュダイ　一四一・四
峻嶮 シュンケン　一〇七・六
純情 ジュンジャウ　一五五・四
生々世々 シャウジャウセゼ　六四・四
受難者 ジュナンシャ　一四六・八
串戲 ジョウダン　八二・三
素人 シロウト　八九・九
薪水の勞 シンスイのラウ　一五五・一〇
神妙 シンベウ　五八・四
人倫 ジンリン　二一七・三
透垣 スイガイ　一五〇・六
薄刈 スヽキハギ　二六八・九
翠微 スイビ　一七二・九
水沫 スイマツ　一八・九
小沙彌 セウシャミ　一三三・三
尺寸 セキスン　二〇・一
雪溪 セッケイ　一〇七・二三
せゐ　四四・三
前栽 ゼンサイ　一五〇・九
千辛萬苦 センシンバンク　二六六・一
餞別 センベツ　一五五・二
側面 ソクメン　一四八・二
祖述 ソジュツ　八・二
素振 ソブリ　二六・二
素描 ソベウ　一四一・三

（タ行）

對校 タイカウ　七九・三
他生曠劫 タシャウクワウ　四四・四
たゞ人 ゴウ　一五七・二
短冊 タンザク　八六・三
軸物 チクモノ　八六・九
父御前 チヽゴゼ　一三五・二
窒息 チッソク　八八・七
厨子 ヅシ　二五九・三
爪紅 ツマベニ　三三・二
釣人 ツリウド　五九・五
追加 ツキカ　一六二・一〇
追捕 ツキブ　六〇・五
偵察 テイサツ　一〇七・八
調度 テウド　一五〇・六
天蓋 テンガイ　二三七・三
天與 テンヨ　一六六・六
動作 ドウサ　二五・七
透徹 トウテツ　一六一・一〇
登攀 トウハン　一〇二・二
常夏 トコナツ　六八・二
年ばへ　二九・四
渡渉 トセフ　一〇五・一一
纜 トモ　五五・三
頓着 トンヂャク　二一・二
とんぼがへり　二七・五

（ナ行）

南薰 ナンクン　七二・二
日程 ニッテイ　一五・一
ニハタヅミ　六七・八
庭潦 ニョウバウ　二六六・七
女房 ノドボトケ　二〇・二三
咽喉佛　

（ハ行）

麥秋 バクシウ　六二・六
白兵戰 ハクヘイセン　一六二・二
母御前 ハヽゴゼ　二五五・三
濱木綿 ハマユフ　三二・三
萬顆の珠 バンクワのタマ

マ
彼岸 ヒガン　一七・一〇
未申 ヒツジサル　八九・六
眸 ヒトミ　七三・一
白月 ビャクゲツ　一三七・七
不精 ブシャウ　六二・七
風味 フウミ　九二・六
船津 フナツ　一六九・二三
不愍 フビン　五五・六
壁畫 ヘキグワ　四四・三
便宜 ベンギ　二三七・五
上枝 ホツエ　八九・二三
奔湍 ホンタン　一四・二三
顎窩 ボンノクボ　一八・七
二・一

（マ行）

蒔繪 マキエ　七一・二
閒遠 マドホ　六五・二三
麻痺 マヒ　一四・二
御名 ミナ　二九・一
名號 ミャウゴウ　六三・三
脈搏 ミャクハク　二三・三
むかし馴染 むかしナジミ　二二・六
無頓着 ムトンヂャク　八四・二
瞑想 メイサウ　一六〇・六
盲縞 メクラジマー　一九・二三
盲滅法 メクラメッポフ　一〇八・二三
藻鹽 モシホ　六三・二
悶え モダえ　一四二・二三
元結 モトユヒ　五五・七
ものの句　一五・八

（ヤ行）

やり戸　一五三・三
湯桁 ユゲタ　八二・一
よからぬ人　一五五・八
よき人　一五〇・三
より竹　五九・二一
領承 リャウショウ　二九・四
輪廓 リンクワク　一六六・九
臨終正念 リンジウシャウネン　六二・三
流人 ルニン　四四・一

（ワ行）

和殿 ワドノ　一七・三
彎曲 ワンキョク　八八・四
居ずまひ　二五・二
位牌 イハイ　九二・二
遺墨 ボク　八二・一〇
尾根 ネ　一〇一・二

…動詞…

（ア行）

汗ばむ　二・三
搔ぐ　二・八
操る　八・四
歩く　三・四
いさよふ　二九・七
いぢける　九二・一〇
打守る　六七・二
蹲る　九五・二
うつろふ　二三〇・五
うねる　一〇七・二
行ひすます　四四・八
おとなふ　一五二・四

（カ行）

かゝづらふ　四六・一〇
懸ける　五九・七
搦め取る　六〇・五
顧みる　一〇九・二
刻む　五六・九
氣遣ふ　一四八・二
消入る　五七・二
切り出す　一〇三・一
潛る　一九・五
燻る　二六・八
くづをる　四五・二

けおさる　一五五・一〇
心する　九・一
拵ふ　一四九・三
ことさむ　一五一・八

（サ行）

遡る　一〇二・一〇
忍ぶ　四四・九
蹲む　七六・一三
喋舌る　一三・一三
すだく　六六・六
峙つ　七三・一
そほ降る　六五・六

（タ行）

闌く　一二六・八
確む　一五・一
たつ　五五・四
蹙まる　一六・七
陳ず　二五・九
ときめかす　一〇八・一

どきめく　一〇六・二
どよむ　六七・一三

（ナ行）

慣る　三・一
根ざす　一六七・一〇
粘る　二・三

（ハ行）

潜む　七・二
ひたる　四・四
更く　一六・一
降暮す　六六・八

（マ行）

します　一二五・四
團がる　一二五・九
水かふ　一二三・一
身まかる　一二二・二
むづかる　六〇・二
旋す　一二七・一

榮る　三・六
めりこむ　一〇・二
倚たす　二・一
もたらす　一〇一・三
悖る　六・三
物す　五三・七

（ヤ行）

和ぐ　一四七・二
ゆたふ　五七・一
搖ぐ　一〇・九
横たふ　一七・二
蘇る　三・一

…形容詞…

（ア行）

あさまし　一三八・一
あらまほし　一五〇・一
幽玄な　八五・五
著し　九九・六

いとほし　二三・四
今めかし　一四〇・八
いみじ　三〇・四
うひ〳〵し　七五・二
おとなし　二六・六
おどろ〳〵し　六九・六
覺束なし　五六・六

（カ行）

かぐはし　三〇・五
頑なる　一五三・五
唐めきたる　一五六・七
心なき　二〇・一
心にくし　一五〇・七
こちたし　一五五・四

（サ行）

うゝなし　一五八・四
すゞろなる　一五九・三
素純な　八五・四
素朴的　一六五・一

（タ行）

つきづ〳〵し　一三〇・一
つゝましつれなし　七六・六
　　六二・二

（ナ行）

溫し　一五・二

（ハ行）

必然的　一四七・九
ふつゝかなる　六八・三

（マ行）

みづ〳〵し　二四・一
見にくし　一五四・四
物やさし　五四・三

（ヤ行）

優し　一〇一・五
よしなし　五八・三

煩はし　一八・八
わびし　一五〇・一〇

…副詞…

（ア行）

聊か　二・八
いそ〳〵と　八七・四
いたく　一五三・一〇
いとゞ　二・七
殷々と　二三・一
うたて　四四・三

（カ行）

かたみに　六七・二
元來　二・六
こはぐ〳〵　一〇八・一

（サ行）

さばかり　一五一・五
さても　一五〇・二
さめぐ〳〵と　五八・二
さん〳〵と　三五・八
至極　一八・三
倏忽　九六・九
隨分　一〇・二
そゞろに　三・六

（タ行）

たわわに　二八・七
つまり　七一・二
とどろに　二二・五
とにもかくにも　二九・一

（ナ行）

のどやかに　一五〇・三

（ハ行）

はかも　五七・三
ひときは　一五〇・四

（マ行）

むけに　四二・六
最早　九九・二

（ヤ行）

夜すがら　一〇〇・七

—（終）—

辭書一覽

(A)

文字會話

大辭典(平凡社)
字源(簡野道明)
詳解漢和大辭典(服部宇之吉・小柳司氣太)
大字典(上田萬年等)
大言海(大槻文彥)
言泉(落合直文・芳賀矢一)
廣辭林(金澤庄三郎)
辭苑(新村出)
大日本國語辭典(上田萬年・松井簡治)
雜調辭典(井上頼圀等)
日本外來語辭典(上田萬年等)
雅言集覽(石川雅望)
故事成語大辭典(簡野道明)
故事熟語大辭典(池田盧洲)
國語學書目解題(東京帝國大學)

地理

大日本地名辭典(吉田東伍)
帝國地名辭典(太田爲三郎)

史傳

國史大辭典(八代國治等)
姓氏家系辭書(太田亮)
大日本人名辭書(東京經濟雜誌社)
日本人名辭典(附假作人名辭典)(栗島山之助)
國學者傳記集成(大川茂雄)
支那人名辭書(難波常雄・鈴木行三・阜川純三郎)
文藝大辭典(齋藤龍太郎)

(B)

神祇

神祇辭典(山川鵜市)

佛教

佛教大辭典(織田得能)
佛教辭林(藤井宣正)
佛教大辭典(葉龍谷大學)

哲學

岩波哲學辭典(岩波書店)
哲學大辭書(同文館)

諺語

諺語大辭典(藤井乙男)
俚諺辭典(熊代彥太郎)
俚言集覽(村田了阿)
格言大辭典(芳賀矢一・服部宇之吉・安井小太郎)

美術

美術辭典(石井柏亭)
日本書畫骨董大辭典(池田常太郎)
日本畫家大辭典(澤田章)

有職故實

有職故實辭典(關根正直・加藤貞次郎)
宮殿調度圖解(附車輿圖解)(關根正直)
裝束圖解(附甲冑武器圖解)(關根正直)
官職要解(和田英松)
故實叢書(今泉定介)

百科

大百科事典(平凡社)
日本百科大辭典(三省堂)
日本歌謠百科事彙(芳賀矢一・下田次郎)
古事類苑(神宮司廳)

(C)

日本文學大辭典(藤村作)
國書解題(佐村八郎)
日本文學辭典(三浦圭三)
漢籍解題(桂湖村)

和歌

國歌大觀・同續篇(松下大三郎)

俳句

俳句大觀(佐佐政一)
新撰俳諧辭典(岩本梓石・宮澤朱明)
俳句全集(正岡子規)

(D)

高等日本文法(三矢重松)
廣日本文典(大槻文彥)
廣日本文典別記
口語法
作文講話及文範(芳賀矢一)
修辭法講話(佐佐政一)
文學概論(本間久雄)

昭和十二年七月二十日 初版印刷
昭和十二年七月二十三日 初版發行
昭和十三年一月二十二日 訂正再版印刷
昭和十三年一月二十五日 訂正再版發行
昭和十六年八月五日 訂正三版印刷
昭和十六年八月十日 訂正三版發行

女子國文新編(四年制) 全八冊奥附
自卷一 至卷八
定價 各金五十八錢

著作者 垣内松三
東京市麴町區飯田町二丁目二十番地
發行者 中等學校教科書株式會社
代表者 山本慶治
東京市本郷區眞砂町三十六番地
印刷者 龜谷良一
(東東二一六)
東京市麴町區飯田町二丁目二十番地
發行所 中等學校教科書株式會社
日本出版文化協會會員番號 一一七五二二

(略名) 文學垣内女國

日本出版文化協會會員番號 一一七五二二
中等學校教科書株式會社
東京市麴町區飯田町二丁目二十番地
日本出版文化協會會員番號 一一七五二二
元給配
日本配給株式會社
東京市神田淡路町二ノ九

広島大学図書
2000302282